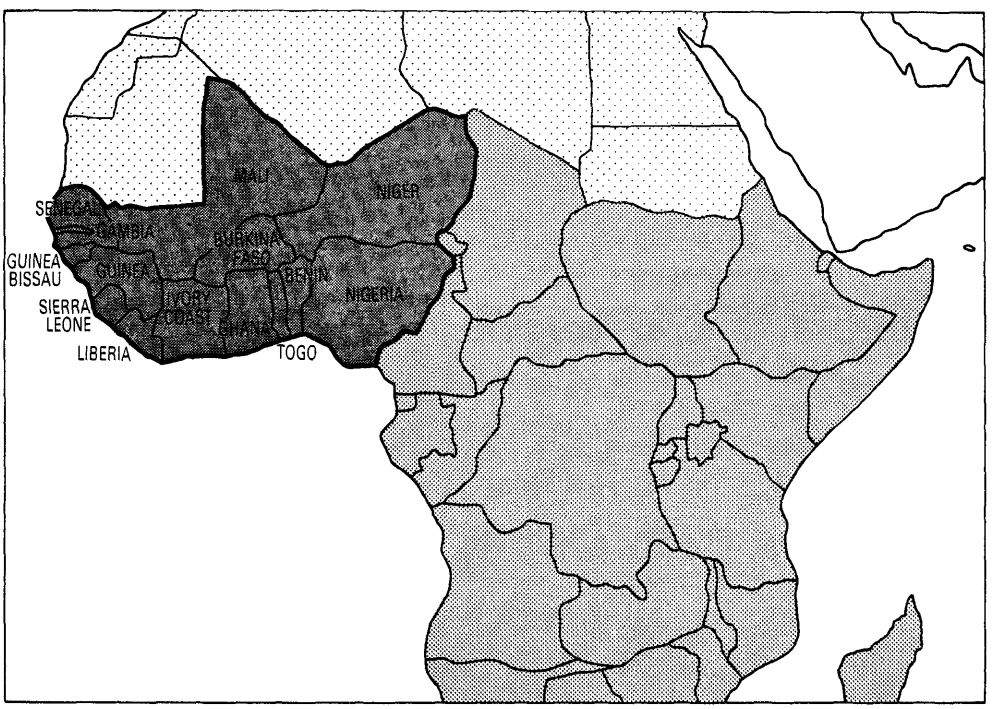
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# イスラムと西アフリカの物質文化



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 竹沢, 尚一郎<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00003644 |

# III　西部アフリカ


MALI
NIGER
SENEGAL
GAMBIA
BURKINA FASO
GUINEA BISSAU
GUINEA
BENIN
NIGERIA
SIERRA LEONE
IVORY COAST
GHANA
LIBERIA
TOGO

# イスラムと西アフリカの物質文化

竹　沢　尚一郎*

序
1. 稲その他の栽培作物の起源
　1) 起源
　2) グラベリマ稲とその分布
　3) 稲の栽培様式
　4) 歴史のなかの稲
　5) 稲その他の栽培作物にたいするイスラムの影響
2. コーラナッツとその交易
　1) コーラナッツの栽培と価値
　2) コーラナッツの名称の分布
　3) 歴史のなかのコーラナッツ
　4) イスラムの影響
3. 綿と毛の2種の布の生産
　1) 織機の種類
　2) 綿花と羊毛の起源
　3) 西アフリカの足踏みペダル式織機の起源
　4) 歴史のなかの布
　5) 布の生産とイスラムの影響
4. しばり舟とくりぬき舟
　1) 西アフリカの舟の種類
　2) しばり舟の製法
　3) しばり舟の起源
　4) 歴史のなかのしばり舟
　5) イスラムの影響
結論

## 序

本稿の目的は2つある。1つは，西アフリカの物質文化にたいするイスラム文化の影響をさぐることであり，もう1つは，歴史資料としての物質文化の有効性を検討することである[1)]。

この2つの点について，最初におおよその方向性をさだめておきたい。

まずイスラムの影響について。西アフリカの物質文化にたいするイスラムの影響と

* 九州大学文学部

1) 本稿は，国立民族学博物館における共同研究会「アフリカ諸民族の技術誌の整理と分析」(研究代表者：和田正平教授)での発表をもとにしたものであり，テーマそのものが和田教授のお勧めによったものである。西アフリカの物質文化の問題について考えるうえで，この研究会での討論や，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の川田順造教授の問題意識の影響を大きく受けている。また本稿の材料となった資料の一部は，1985年度文部省科学研究費補助金(「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤及び共生関係の文化人類学的研究」研究代表者川田順造東京外語大AA研教授）の給付を受けておこなわれた調査によって得られたものであり，取りまとめにさいしては，1985，1986年度の文部省奨励研究A（「西アフリカのイスラム化とそれに伴う社会変化の研究」）の補助を受けている。記して感謝したい。

しては，2つの仕方が存在した。1つは外部から，すなわち北アフリカからサハラ砂漠をこえて伝えられた影響であり，もう1つは西アフリカ内部の，イスラム化した集団がはたした役割である。この2つのイスラム勢力はとうぜんのことながら密接にむすびついていたが，その影響の仕方は一様ではなかった。

622年のヒジュラからまもなくアラビア半島の覇権を握ったアラブ人は，8世紀中頃までにはマグリブ全土を勢力下におき，現在のモロッコからイランにいたる広大な土地を1つの宗教圏，経済圏のうちに統合するにいたった。そうした過程で，マグリブの先住民族であったベルベル人は，スンニー派を信奉するアラブ人に対抗するためにイバード派等のイスラムを受けいれたが，そのかれらが西アフリカとの最初の接触をもったイスラム教徒であった [Lewicki 1964: 294sq.; 竹沢 1988: 22]。

このベルベル人にとってもアラブ人にとっても，サハラ交易の掌握は重要なものであったらしく，アラブ文献ではじめて西アフリカに言及している8世紀後半のアル・ファザーリー (al-Fazārī) の記録は，ガーナ帝国をはっきりと「金の国」と記している [Cuoq 1975: 42]。さらに10世紀の末までには，ガーナのほかに，ガオ，アウダガスト，マリなどの西アフリカ各地の地名も登場するようになり，北アフリカ人の最大の関心事であった金の生産や交易の記述にくわえ，現地の宗教や風俗，王制，食生活等についてのかなりくわしい記事もあらわれてくる [Cuoq 1975: 48–78]。これはまさに北アフリカと西アフリカの交流の親密さを物語るものであるろう。

しかしながら，西アフリカと北アフリカとの交流がこの時代にはじまったと考えたなら，明らかに間違いである。サハラ砂漠の岩壁に残る多くの戦車の絵が示しているように，サハラがまだ完全には乾燥化していなかった時代には，サハラは何本もの「戦車の道」によって縦横に走られていた。なかでもモロッコ南部とアウダガスト，ガーナを結ぶ西のルートと，チュニジア南部から，タッシリ・ナジールをへてガオにいたる東のルートの2本のルートの存在は，良く知られている [Mauny 1960: 428–429; Bovill 1978 (1958): 13–23, 図1参照]。このうちとくに西のルートは，隆起地の裾を縫って通っているため比較的雨量も多く，もっとも容易な道であり [Devisse 1972: 60]，これを通っての交流は有史以前から続いていたと考えられている。

一方，サハラ以南の土地では，イスラムについての記述が文献にあらわれるのは10世紀以降である。10世紀末のアル・ムハッラビー (al-Muhallabī) は，ガオの王がイスラム教徒であることを明言しているし [Cuoq 1975: 77]，11世紀のアル・ベクリー (al-Bakrī) の記録では，ガーナの王自身はイスラム教徒ではないにしても，家臣や商人の多くはイスラム教徒であること，そしてガーナ以外にも多くのイスラム教

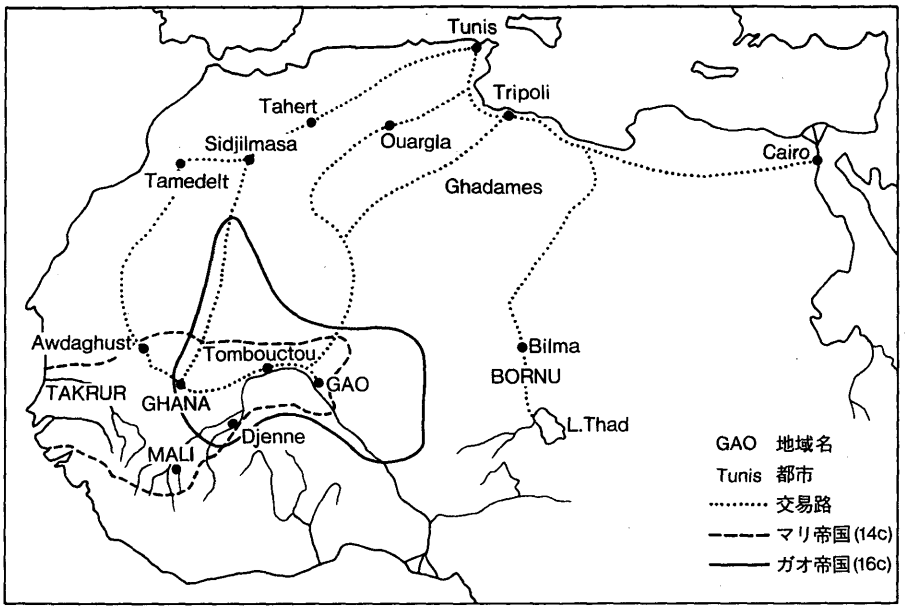



**図1**　中世初期の交易路 (8–12 C) と西アフリカの大帝国
[LEWICKI　1964: 519; MAUNY　1961: 428–437] をもとに作図

徒の町が存在していることが記されている [CUOQ　1975: 96–103]。なかでも旱魃に苦しんだマリの国では，王がイスラム導師の勧めにしたがってコーランの一章を読んだところ雨が降りだし，それ以来この国ではイスラムが国教として採用されたという出来事について書かれており [CUOQ　1975: 102–103]，この時代には西アフリカでも相当のイスラム化の進展が見られたと考えることができよう。

それゆえ，西アフリカの物質文化にたいするイスラムの影響を考えるには，いくつかの層の存在を考慮することが必要である。その最下層には，有史以前からつづいていた北アフリカ文化の影響があり，これは前イスラムであるだけでなく，イスラム以前には北アフリカを統一した勢力が存在しなかったのだから，さまざまな経路をへて浸透していたのであろう。やがて8世紀になると，まずイスラム化したベルベル人，ついでアラブ勢力の手によって，イスラム文化の影響がまとまった形で入るようになる。しかしその影響は，北アフリカ勢力の実効的な西アフリカ支配が2度に限られる以上（1057年のムラービト朝のガーナ帝国の支配と，1591年のモロッコ軍によるガオ帝国の征服とニジェール川中流域の支配），外部からの作用にとどまっていた。ついで10世紀を過ぎると，西アフリカ内部のイスラム交易者の影響がしだいに優越していく。それは以下に見るように，地方のレベルですでに存在していた文化要素を開発したう

えで他に伝えたり，あるいは北アフリカから受けとった要素を西アフリカに適合させたうえで広く伝達したりすることによって，西アフリカのほぼ全域で社会と経済の変革の動因となったのである。

つぎに歴史の概念について見ておくことにしたい。西アフリカの歴史を問題にするという場合にいくつかの立場が可能であろう。その1つは，文字に書かれた「歴史」を例外的にしかもたなかった彼らの社会において，「歴史」がいかに語られ，生きられてきたかを検討することであり，それをつうじてわたしたちが自明のものとしている「歴史」概念そのものを問い直すことである。こうした立場はたしかに重要な問題提起を含んでいるが[2)]，わたしたちがここで問題にしようとしていることとは異なっている。わたしたちがここで試みたいのは，一般的な意味での歴史，編年体を中心とする歴史の再構成に，物質文化の研究がどれだけ有効かを考えることである。

そうした意味での黒人アフリカの歴史研究は，周知のように大きな困難を抱えている。西欧諸国の植民地経営が本格化する19世紀以前の，文字記録や遺跡等の歴史資料の乏しさに由来する困難である。

西アフリカの過去を再構成するのに有用な歴史資料は，以下のいくつかのカテゴリーに分けることができる。

1. イスラムの地理家，歴史家，旅行家の書いた資料。8世紀から16世紀にかけて書かれたこれらの資料は，それが記載している事項や出来事と同時代のものであるという点で大きな価値をもっている。しかし一方で，これらの記録の著者は，一度も西アフリカを訪れたことがないか，一度しか訪れたことのない人びとであり，その利用については十分な注意が必要である。
2. ヨーロッパの交易者，植民者が残した記録。15世紀の後半から，まずポルトガル，ついで17世紀からイギリス，オランダ，フランスなどの資料があらわれてくる。しかしこの種の資料についても，1と同じ長所と欠陥が認められる。
3. イスラム化した西アフリカの人びとがアラビア語を用いて記した歴史書。この資料は，現地で書かれたものであるという点で第一級の価値をもっている。しかしその地域が限られていること，資料批判が十分でなく，歴史と神話が渾然としていることなどの点に問題を残している。
4. 口頭伝承。文字をもたない社会において唯一の「歴史」として機能してきたものである。しかしこれもまた，すべての社会が同じほどの深さの伝承をもつわけではないこと，絶対年代の測定が困難なことなどの問題をもっている。

2) この問題は，わが国ではとくに川田順造によって論じられている［川田　1976, 1988］。

5. 考古学調査。専門家による発掘調査は近年とくに盛んになっており，その中から古ジェンネの調査など，これまでの歴史認識をくつがえしたものもあらわれてきた。しかし全体に西アフリカの調査は立ち遅れているのが現状である。

これらの資料は，以上のようにさまざまの欠陥をかかえ，しかもその量は絶対的に不足している。そうであれば，西アフリカの過去を再構成するためには，これらの資料を補ってくれる何ものかが必要なことは明らかだろう。このとき物質文化こそは，現在のうちに過去を内包した資料であるという点で，過去の再構成に大きく貢献しうるものであると思われるのである。

わたしはすでに別の箇所で，アフリカ原産の稲オリザ・グラベリマ (*Oryza glaberrima*) を手掛かりに，これまで取りあげられることのなかった西アフリカ史の2，3の事柄について考察してきた [竹沢　1984]。ここではこの試みの継続・発展として，いくつかの項目を加えながら検討していくことにしたい。

ここでとりあげるのは，つぎの4つの事項である。

1. 西アフリカの人びとの生活の基盤となった，グラベリマ稲をはじめとするいくつかの栽培作物の起源と展開。
2. イスラムの禁じるアルコールにかわる嗜好品として広く愛され，重要な交易品とされたコーラナッツとその交易集団。
3. 西アフリカ独特の幅の狭い織機と，それによって織られた綿と毛の2種の織物の起源と分布。
4. 穀物や奴隷の輸送をにない，それによって中世の大帝国の経済を支えたしばり舟の種類と製造。

以下にこの順で見ていくことにしたい。

## 1. 稲その他の栽培作物の起源

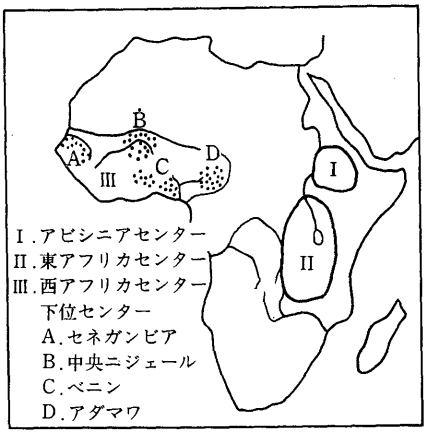
### 1) 起　　源

サハラ以南の農業の起源についてはこれまで諸説があったが，今日では他からの影響を含まない独立の起源を唱える研究者が有力になっている。その独立起源説の根拠としてあげられているのは，以下の事実である。1. サハラ以南の農業は，中東に起源をもついわゆる「地中海農耕文化」の主要な作物である大麦や小麦等を1つも受けとっていないこと [Murdock　1959: 64–66]。2. サハラ以南の土地でトージンビエやソルガムなど多くの作物の栽培が開始されたことが，野生種の存在によって確か

められていること [PORTÈRES 1950: 195–205]。3. 西アフリカの各地（マリ，シエラレオネ，ガーナ，ナイジェリア等）で，BC 4000-3000 年頃の土器や磨製石器が多く出土しており [PHILLIPSON 1985: 135–139]，これが農業の起源に結びつけて考えられること [CLARK 1970: 199]。このようにサハラ以南の農業の独立発展が明らかであるとすれば，残る問題は，それがいつ頃，どこで開始されたかということである。

その開始の時期について，マードックはBC 5000年頃においている。その理由は，「地中海農耕文化」がエジプトにつたえられた時にはすでにサバンナ地帯で農業が独立に発達していたため，後者は前者からいかなる作物も受けとらなかったということである [MURDOCK 1959: 66]。しかしこの時期については推測の域を出るものではない。これまでに確認されたかぎりでは，西アフリカのサハラ以南地域で出土する最古の作物は，ソルガムについてはBC 2000年頃 [SHAW 1976: 113]，トージンビエについてはBC 1100年頃 [MUNSON 1976: 105–106]，クラベリマ稲については起源前後 [MCINTOSH and MCINTOSH 1981: 15] でしかなく，より正確な時期の決定には今後の考古学の発展をまたなくてはならない[3)]。

一方，サバンナの農業が開始された地域についても，以下のようにさまざまの説がある。マードックはそれをニジェール川上流地帯においているが，その理由は，この




I.アビシニアセンター——ソルガム（*S.durra* 他3種），トージンビエ（4種），ゴマ，テフ
II.東アフリカセンター——ソルガム（3種），トージンビエ（5種）
III.西アフリカセンター
A.セネガンビア——ソルガム（1種），トージンビエ（4種），フォニオ，グラベリマ稲（二次センター）
B.中央ニジェール川——グラベリマ稲，ソルガム（5種），トージンビエ（1種），シソ，カリテ
C.ベニン——ヤムイモ（*D.cayenensis* と *D.dumetorum*），油ヤシ，コーラナッツ
D.アダマワ——ゴマ，トージンビエ（3種）

**図2**　ポルテールによるアフリカの栽培作物の起源地 [PORTÈRES 1950: 505]

3) 古い時代の作物の出土がないことから，考古学者の見解はわかれている。多くの研究者は，アフリカのサバンナ農業の独立起源を主張するが [CLARKE 1970: 199–203; HARLAN 1982: 628–635]，なかにはその説に懐疑的であったり [SHAW 1976: 116–138]，「北からの影響のもとに始まった」とする見方も存在する [PHILLIPSON 1985: 137–139]。

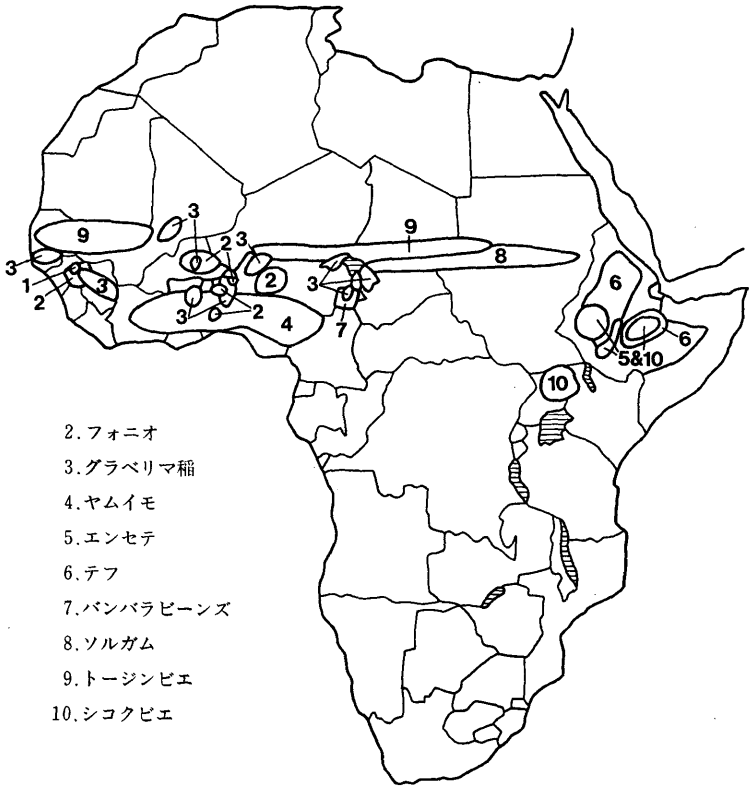



**図3**　ハーランによるアフリカの栽培作物の起源地 [HARLAN　1971; 471]

地域には250種以上の栽培作物があること，そしてこの地のマンデ諸族は人口的にも文化的にも他に優越していることである [MURDOCK　1959: 66–67]。これにたいし，数多くの栽培作物と野生種のたんねんな分布をもとに，フランスのエスノ・ボタニストであるポルテールは，図2に見られるようないくつかのセンターを想定している [PORTÈRES　1962: 195–205]。さらにハーランは，栽培作物の起源地と想定される土地が分散しているところから，図3のようにセンターではなく拡散したノンセンターを考えている [HARLAN　1971: 471]。

## 2)　グラベリマ稲とその分布

サバンナ起源の作物のうちでも，わたしたち日本人に関心の深い作物にグラベリマ稲 (*Oryza graberrima*) がある。この稲の起源地とその後の伝播についてはポルテールのくわしい研究がある。かれの研究についてはすでに別の箇所で紹介したことがあるので [竹沢　1984]，ここでは簡単に見ておくことにしたい。

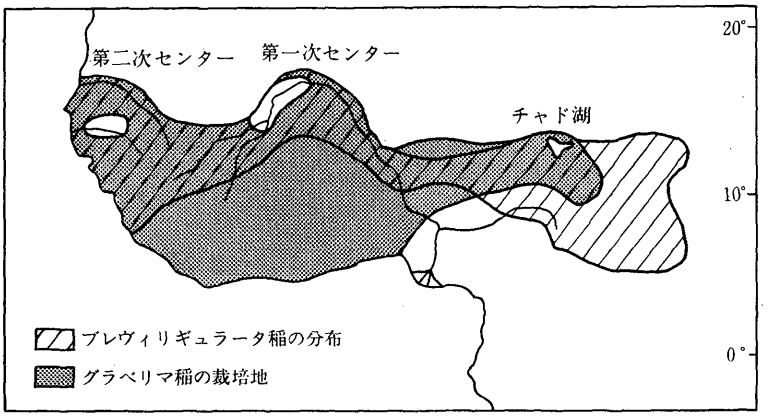



**図4**　グラベリマ稲と野生稲の分布 [PORTÈRES　1950: 491]

ポルテールらによると，アフリカには2種の野生稲が存在している。1つは多年性のバルティ稲 (*O. bartii*) であり，もう1つは一年性のブレヴィリギュラータ稲 (*O. breviligulata*) である。前者は熱帯アフリカに広くみられるのにたいし，後者の分布は西アフリカに限られ，グラベリマ稲の分布とほぼ重なっている (図4参照)。このことからグラベリマ稲の直接の先祖はブレヴィリギュラータ稲と考えられている [CHEVALIER　1932: 1026; PORTÈRES　1955: 833–848][4]。また栽培の開始された地域については，ポボルテールはニジェール川中流域の，ニジェール川内陸三角洲と呼ばれる地域を考えているが (図4で第1次センターとして示されている箇所)，その理由として，この地域に稲の種類が多数見られること，そしてその多くが遺伝学的にみて優勢形質をもっていることをあげている [PORTÈRES　1950: 490]。

さらにその伝播について，かれは以下のような考察をおこなっている。現在この地に居住し，広く人口に膾炙している malo, maro, mano の名称で稲を呼んでいるのはマンデ系の人びとであるが，かれらが稲を栽培化したと考えることはできない。と

4) グラベリマ稲がブレヴィリギュラータ稲から栽培化されたとする見解について，のちに Chevalier は否定的になった。かれによれば，前者は芒が短く，穎果が細く，籾が褐色であるのにたいして，後者は芒がきわめて長く，穎果が太く，籾が白色であるというぐあいに，大きな形態上の相違をみせているためである [CHEVALIER　1937: 413–415]。内陸三角洲の農民たちは田の雑草として2つの野生稲の違いをよく知っており，マルカの人びとはバルティ稲をレー，ブレヴィリギュラータ稲をブガとよんで区別している。かれらは「ブガが出てきたら田を変えなくてはならない」といい，ブレヴィリギュラータ稲を，多年性の雑草であるバルティ稲と栽培種であるグラベリマ稲との混種とみなしている。またグラベリマ稲とブレヴィリギュラータ稲の分布がほぼ一致する点など，グラベリマ稲が一年性のブレヴィリギュラータ稲からではなく，多年性のバルティ稲から栽培化された可能性も考えられる。なお *Chang* は，グラベリマ稲がブレヴィリギュラータ稲からではなく，芒の長いロンギスタミナータ稲 (*Oryza longistaminata*) から始まったと考えている [CHANG　1976: 98–104]。

**表1**　西アフリカの稲の名称と栽培化の歴史

| | 部族集団（地域） | 名　　称 | 意　　味 | 栽培化の時期 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | クワ系（ガーナ，コートジボワール） | alo, aro, ano | 「食物」一般をさす | 栽培／採集の区別なし |
| 2 | バンツー系（ナイジェリアより南東） | ma–lo, ma–ro, ma–no　ma–＝集合詞 | 「米」「シコクビエ」など，ある「定まった種類の穀物」をさす | 穀物の栽培開始，しかし米はまだ |
| 3 | セミ・バンツー系（ギニア，シエラレオネ） | ma–lo, ma–ro, ma–no　ta/ma＝単／複 | 「米」を示す，バンツーの ma– が残ったもの | 栽培開始，とくに稲作儀礼さかん |
| 4 | マンデ系（マリ） | malo, maro, mano | 「米」，名詞クラスなし，maro, maloを語幹としてうけとる | セミ・バンツーから稲をうけとって栽培さかん |
| 5 | マンデの周辺，モシ，ソンガイ（オートボルタ，ニジェール） | ma, mo, mu | 「米」，malo, mano の一部を語幹としてうけとる | 比較的新しい |
| 6 | セミ・バンツーのうちジョロ系（セネガル） | pa–mano, e–mano, i–molu | 「米」，マンデ系から mano 等をうけとり，それに接頭詞をつける | 新しい |
| 7 | グラベリマ稲のない地域 | eruz(アラブ), arroz（ポルトガル）の名称を用いる | 「米」はヨーロッパ人，アラブ人がもってきた | 近年 |

[PORTÈRES　1959: 189–233] にもとづいて作図

いうのも，かれらは稲作にむすびつく儀礼や神話をもっていないからであり，かれらがこの名称を稲とともに他から受けとったことは十分推察できるからである。ポルテールによれば，稲作を開始した集団としてもっとも可能性の高いのは，ギニアからシエラレオネにかけての，バガ，テムネ，ランドマなどの西大西洋語族（ポルテールのいう「セミ・バンツー系」）の人びとである。というのは，かれらのもとではじめて稲が ma–lo, ma–ro などの名称で呼ばれるようになったからであり，かれらは稲作とそれに結びついた儀礼にとくに熱心だからである(表1)。

なおポルテールによれば，この西大西洋語族の人びとはニジェール川中流域で稲作を開始したが，のちにマンデ系の人びとに押されて南下していき，稲をもって現在の居住地であるギニア山地に移り住んだ。そしてマンデ系の人びとがかれらから稲を受けとって，これをさらに周辺のソンガイやジョロなど，現在にいたるまで稲作に熱心な諸民族に伝えたというのである [PORTÈRES　1959: 189–233]。

このポルテールの整理をもとに，西アフリカの主要な民族における稲の名称の分布を図示したのが図5である。ここで興味深いのは，malo, maro 系の名称がきわめて広い範囲におよんでいること，そしてハウサーカヌリの sinkafa 系の名称と「棲み分け」ていることである。このハウサ社会や，図で1で示されているアシャンティ社会

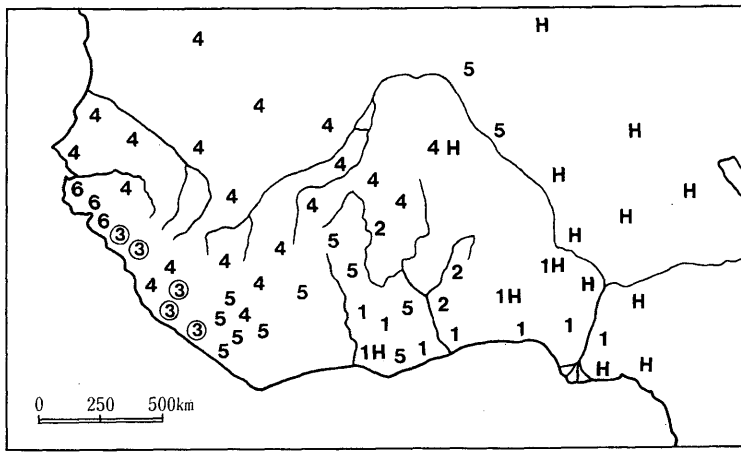



**図5**　西アフリカの稲の名称の分布

数字は，表1の左欄の数字をあらわす。③が，Portères によれば稲の栽培化をはじめた西大西洋語族の社会（Portères のいう「セミ・バンツー系」）。H は，ハウサ-カヌリの Sinkafa 系の名称をもつ社会。[PORTÈRES　1960: 176-220] にもとづいて作図。

にマンデの影響が及んだのは14世紀と考えられているが [竹沢　1988: 23-24]，かれらの稲の名称はマンデのそれとはことなっている。これらの社会はその時期までに，すでに栽培作物としての稲を知っていたのであろう。

稲の栽培はいつ頃開始されたのであろうか。ポルテールはそれを BC 1500年以前としているが，この数字は推測の域を出るものではない。かれの推定の根拠となったのは，セネガンビアの巨石文化と図4の第2次センターとがほぼ一致し，これが BC 1500-800年と考えられていたことにあり，第1次センターであるニジェール川中流域での栽培化の時期はそれより早いはずだというのである [PORTÈRES　1950: 490-491]。しかしその後の調査で，セネガンビアの巨石文化は BC 2-AD 8 世紀と大きく修正されている [CALVOCORESSI & NICOLAS　1979: 14]。しかもポルテール自身，表1に見られるように，稲の栽培化は他の栽培作物が形成されたあとで，その湿地への適用として始まったと考えており [PORTÈRES　1959: 233]，稲の栽培化は第1次センターで初めてグラベリマ稲が出土する紀元前後の時期 [McINTOSH & McINTOSH 1981: 15] よりそう早くない時期に開始されたと考えるべきかもしれない。

### 3)　稲の栽培様式

古くから稲作に従事していた西アフリカの諸民族のあいだには，大きく分けて3つの稲の栽培の様式が存在した。ニジェール川流域のウキイネ栽培と，ガンビア川から

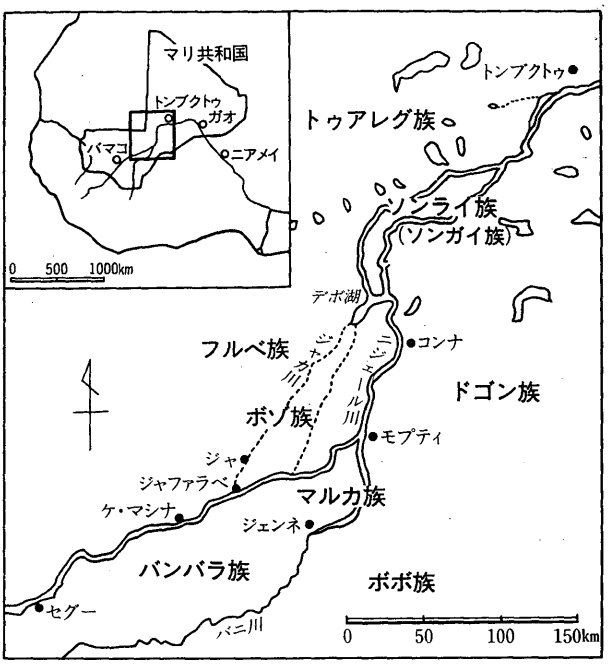



図6　ニジェール川内陸三角州と民族集団

ギニア湾岸にかけての灌漑水田，そしてギニア山地の陸稲である [Dresch 1949: 295–312][5]。ここでは筆者の調査地であるニジェール川内陸三角洲の伝統的な稲作について，かんたんに見ておくことにしたい（図6）。

この地方で稲作に従事しているのは，マルカと呼ばれる集団と，牛牧民であるフルベのかつての農耕奴隷であるリマイベと呼ばれる人びとである。かれらは，この地方の中央を流れるニジェール川をはさんで，おおよそ北にリマイベ，南にマルカというぐあいに棲みわけている。またこの分布は，ほぼ水深の深い水田（リマイベ）と比較的浅い水田（マルカ）の違いに対応している。

この地方の年平均降水量は500 mm 前後でしかなく，天水にたよっては稲作をおこなうことは不可能である。そのため，稲作はもっぱらニジェール川の自然氾濫水に依存しておこなわれている。水田は一般に深い水田と浅い水田とに分けられており，両

5）西アフリカの稲住民とその社会についての研究は，きわめて遅れている。西アフリカの主要な3つの栽培様式についてはドレッシュの論文にかんたんな総括的記述があるほか [Dresch 1949: 295–312]，灌漑と田植えをともなう発達したジョラ社会やバガ社会の稲作については，それぞれ [Périssier 1966: 709–758; Paulme 1957: 263–276]，ギニア山地の陸稲栽培についてはキシ社会のそれが [Paulme 1970 (1954): 21–49] に，ニジェール川の氾濫水によるウキイネ栽培については [Viguier 1937: 287–326; Vincent 1963: 66–111; Gallais 1967: 199–254] に比較的くわしい記述があるだけである。

**写真1**　マルカの稲の刈り入れ (Dia 村　1981. 11. 10)

者のあいだには1m程度の違いがある。そのため，深い水田では氾濫水を受けるのが浅い水田より2-3週間早く，また水のひくのも1月程度遅れる（図7）。一般に晩生の稲の方が味もよく，収量も多いため，こちらのほうが好んで植えられるが，そうすると急激な増水をかぶる危険もふえ，魚の害もうけやすくなる。そのため，一軒の農家が浅い水田と深い水田を含む何枚かの田に，いく種類もの稲をまくことが一般的であ

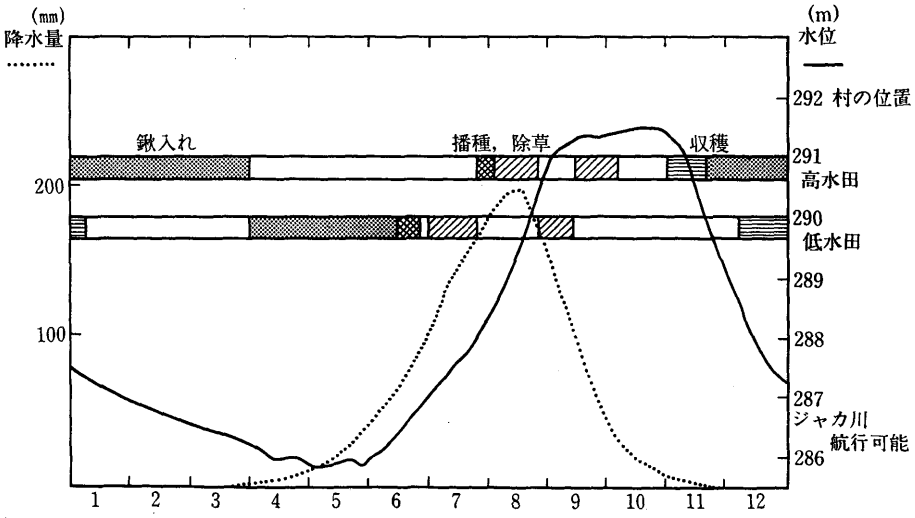



**図7**　ニジェール川内陸三角州における降水量，水位と稲作カレンダー
降水量はモプチにおけるもの。1935～1956の平均 (年 540.5 mm)。[GALLAIS　1967: 51-52] による。水位はジャファラベにおけるもの。1946～1948年。[DAGET　1949: 6] による。

**写真 2**　リマイベの稲の刈り入れ (Toguéré-Koumbé 村　1986. 10. 31)

**写真 3**　リマイベの刈り入れ（収穫した稲を舟で村へ運ぶ）
(Toguéré-Koumbé 村　1986. 10. 31)

る。その結果，大きな危険を避けることはできても，単位面積あたりの平均収量はかぎられたものになっている。

図 7 には，マルカ農民の平均的な稲作のカレンダーが記されている。図に見られるように，稲刈りがおわるとすぐ田の鍬入れがおこなわれ，6 月の最初の雨とともに深水田では種蒔きがばらまきでおこなわれる。ついで浅い水田での種蒔き，除草とつづき，深水田ではしばしば 2 度目の除草がおこなわれる。これは胸まで水につかりながらおこなう大変つらい作業である。浅い水田から水がひきはじめる11月頃，この田で稲刈りがおこなわれ，そして12月から 1 月にかけて深水田でも稲刈りがおこなわれて，

**写真 4**　マルカの脱穀，収穫された稲が少量のばあいには，その場でござを広げて脱穀がおこなわれる。(Dia 村　1981. 11. 10)

一年の農業の暦が閉じられるのである。

この地方の農民を見て感心するのは，その勤労意欲の高さであり，知識の正確さである。この地方の農民は，ウキイネと乾燥に強い種，早生の種と晩生の種，粒の大小，形態，収量等におうじて稲をこと細かに分類しており，田の浅深，その年の降水量，氾濫水の高低等の予想にしたがってそれらを植えわけている[6]。しかもかれらの労働は，長期間の鍬入れ，水につかっての除草，収穫の時期には猪の害をふせぐため1ケ月ほど水田のまわりで見張りをして過ごすことなど，他のトージンビエやソルガム等の栽培にくらべると大変な労力を必要とする。しかしかれらは稲の栽培に強い愛着をもち，米の御飯に固執し，またさまざまな料理法も知っている。こうしたことを考えあわせると，かれらのもとで稲の栽培が長い歴史をもっていることが容易に推測されるのである[7]。

ところで，このニジェール川内陸三角洲は，西アフリカの稲の起源の地とされる土

6) フランスの農学者ヴィギュエは，ニジェール川中流域で栽培されているグラベリマ種の稲を55種あげ，その1つ1つについて名称と，収量，粒の大小，早生と晩生の区別等をしるしている [Viguier　1938: 52–71]。また Lauzanne は，ガオの付近で栽培されている稲の名称を53あげている [Lauzanne　1920: 43]。

7) こうしたマルカ集団の手による洗練された稲作や，その下流のさらに発達したソンライの稲作は，1966-68年，72-74年，82-84年とつづいた旱魃により壊滅的な打撃をうけた。とくに82-84年のそれは前代未聞のものであり，これにセレンゲやマルカラのダムの建設等の「開発」がくわわって，ニジェール川の水流と水位は大きく変化するにいたった。現在ではマルカやソンライの水田にほとんど氾濫水が届かなくなっており，1981年に調査をおこなった何箇所かの水田の多くは，1985年の時点では完全に干あがっており，もはや耕作はおこなわれなくなっていた。

地であった。そうであれば，この土地の米作民であるマルカやリマイベが，西アフリカで最初に稲の栽培を始めたのであろうか。

ところが奇妙なことに，このマルカという集団は，記録にあらわれる西アフリカ最古の王国であり，11世紀まで繁栄したガーナ帝国の支配層の末裔を自称し，サヘル地帯の乾燥化にともなって南下してこの地にいたったと称している。かれらはがんらい米作民ではなかったし，その言語は現在では漁猟民ボゾのそれに吸収されているが，そこでは稲は duga ないし dua とよばれ，西アフリカに広く流通する malo 系の名称ではない。しかもその dua という名称は，それぞれ「食べる」，「食糧」をあらわす dun, duun と未文化なのである［竹沢　1984: 94］。また，もう一方のリマイベにしても，もとフルベの農耕奴隷であったかれらの前身が何であったかについてはまったく知られていない。15世紀頃に始まるフルベ人の移動にともなって形成された農耕奴隷集団としてのリマイベが稲の栽培化を開始したと考えることは，それゆえ不可能なのである。

稲の栽培化にかんするわたしの仮説はこうである。現在マルカとよばれる集団のなかで，ノノと呼ばれる人びとにかんする伝承がわずかに存在する［Monteil　1971 (1932): 30–36; Gallais　1967: 79–81］。おそらくこのノノというのは，ポルテールのいうセミ・バンツー系の人びとであり，かれらが最初にこの土地で稲作を開始したのであろう。ところがかれらは，のちに農業を知らない漁猟民集団ボゾに言語的に吸収されて稲の固有の名称をうしない，さらに11世紀までにガーナ帝国から南下したマルカ集団によって交易センターであるジェンネやジャ付近のかれらは吸収された。そのあとでフルベがこの土地に勢力を拡大するにいたって，マルカの勢力の外にあったかれらを農耕奴隷として取りこんでリマイベと呼んだのではないだろうか。

もうひとつ稲の栽培にかんして興味深い事実は，高度に発達した稲の栽培様式をもつ民族の分布である。ニジェール川沿いでは，内陸三角洲より下流のソンライの人びとが大規模な堤防の構築と田植えをともなう発達した稲作をおこなっており［竹沢 1984: 81–84］，またその地から 2000 km ほど離れた大西洋岸のジョロやバガの社会でも，堤防の構築や灌漑，田植えをともなう集約的な稲作が見られる［Pélissier 1966: 709–758; Paulme　1957: 266–273］。さらにニジェール川の南方に広がるセヌフォ社会でも，おなじように発達した稲作の存在が報告されている［Holas 1957: 58–60］。これらの3つの社会は，地理的に遠く離れているだけでなく，言語

的にも起源においてもいかなる共通性ももっていない。その意味で，西アフリカのなかでかれらだけがこのように発達した稲作の様式をもつという事実は，ひとつの謎として残るのである。さて，これらの社会では，稲はソンライ語では moo，セヌフォ語では mo, ma，ジョラ-バカ語では emano と呼ばれている [PORTÈRES 1950: 193–194]。ボルテールの表でいえば5ないし6に相当するわけである。このカテゴリーに属する社会は，かれの解釈ではかなりのちの時代にマンデから稲作を受けとったのであった。とすれば，これら3つの社会は，マンデの土地での稲作が高度な技術をとるようになったのちに，それを受けとった（あるばあいにはさらに発展させた）と解釈することはできないであろうか。

### 4) 歴史のなかの稲

西アフリカの歴史のなかで，稲はアジアにおいてと同じようにきわめて大きな役割をはたしてきた。西アフリカに巨大な覇権を確立したマリ帝国とソンガイ帝国は，いずれも米を主食とする人びとが建設した国家なのである。

いくつかの記録をひもといてみよう。たとえば1352年にマリの首都を訪れたイブン・バッータ (Ibn Baṭṭūṭa) は，その町の役人から米とフォニオ，牡羊，牛を贈られたことを記しているが，そのほかの作物については何もふれていない [CUOQ 1975: 298–301]。それより早く，1349年に記録を残しているアル・ウマリー (al-'Umarī) はつぎのように書いている。「(マリの首都の住人の）おもな食べ物は米とフォニオであり，他にソルガムや，量は少ないが小麦がある。ソルガムは人間が食べるものであるが，どうじに馬や他の家畜の飼料でもある」[CUOQ 1975: 266]。一方，ガオについてイブン・バッータは，「これはナイル（ニジェール川のこと）のほとりにある大きな町で，スーダンのなかでもっとも美しく，もっとも豊かな町である。ここには，米，牛乳，鶏，魚がたくさんある。」と書き [CUOQ 1975: 316]，また16世紀の初めに2度にわたってサハラ以南の土地を訪れたレオ・アフリカヌスは，ガオの住人の食べ物について，「パンと肉はまことに豊富であるが，酒と果実はない。メロン，キュウリ，ウリは沢山あり，米はすごく沢山ある」と記している [LÉON L'AFRICAIN 1956 (1926): 471]。

あるいはこのような引用のしかたは恣意的に見えるかもしれない。そこで，イスラムの文献にあらわれる中世の西アフリカの食物にかんする記事を，すべてぬきだして

**表2**　中世の西アフリカの主要作物

| 世紀 | 記録者 | テクレール | ガーナ | マリ | ジェンネ | ガオ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10〜11 | アル・バクリ等 | ソルガム | トージンビエ，小麦，ソルガム，マメ | — | — | — |
| 12 | アル・イドリシ等 | ソルガム，スイカ | トージンビエ，小麦 | — | 米，ソルガム | 米，マメ，ゴマ，サトウキビ |
| 14 | アル・ウマリ | — | — | 米，フォニオ，ソルガム，マメ，ヤムイモ | — | — |
| 14 | イブン・バツータ | — | トージンビエ，スイカ（少量） | 米，フォニオ，ヤムイモ | 米，フォニオ，トージンビエ | 米，スイカ |
| 16 | レオ・アフリカヌス | — | トージンビエ，ソルガム（少量） | 「穀物」 | 米，大麦 | 米，スイカ |

[Cuoq 1975: 77, 83–84, 96–108, 129–140, 266–270, 294–318], [Levtzion and Hopkins 1981: 95–100], [*Leon l'Africain* 1956: 463–472] にもとづいて作図。
表中の地域にかんしては図1を参照のこと。

表にしてみた。それが表2である。これを見れば，西アフリカの食物にかんするかぎり，北アフリカの知識はほとんど誤差を含まない，正確なものであったことがわかる。そしてここから，西アフリカの中世の大帝国を支えていたのが，主要作物としての稲の栽培であったことが確認されるのである。

稲はなぜそのような役割をはたすことができたのだろうか。それには2つの理由があったように思われる。稲そのものがもつ他に秀でた経済的価値と，稲作に結びつけられた社会-政治的状況である。まず前者について，フランスの地理学者ドレッシュは，他の作物にたいする稲の経済的利点をつぎのようにまとめている。1．単位面積あたりの収量が，トージンビエやソルガムなど，熱帯アフリカで好んで栽培されている作物より多いこと。2．氾濫域では唯一可能な作物であるとどうじに，毎年栽培が可能なこと。3．味が他の穀物より評価され，高い商品価値をもっていること。4．他の作物より長期の保存によく，遠距離の輸送にも適していること。5．氾濫域の灌漑稲作をはじめとして，一般に稲作は他の穀物より多くの労働力と知識を必要とし，それが政治的・経済的な安定につながったこと [Dresch 1949: 296–297]。稲の栽培が政治的・経済的な安定と発展に寄与した点について，かれのこの解釈はおおむね的を射たものといえよう。

稲作と中世の大帝国との関連については，もう一つの要因があった。それは奴隷による農業生産ということである。マリ帝国を支配したマンリケは，最初は現在の土地より北の地方に居住していたといわれ [MONTEIL 1930: 8]，もともとかれらのもとでは稲の栽培はあまりおこなわれていなかったようである。そのことは，かれらのもとで稲作にかんする神話や儀礼がほとんど存在しないこと [DIETERLEN 1955: 43 sq.][8]，そしてマリ帝国の中心地であったマンデの地以外では稲作が熱心にはおこなわれていなかったこと[9] に示されている。ところが，のちにサヘル地帯の乾燥化にともなって南下したかれらは，ニジェール川流域で多くの稲作民（おそらくポルテールのいうセミ・バンツー民）を見つけたのであろう。この人びとにたいし，マンリケは吸収・同化という方法をとらなかった。おそらく農業形態の相違やそれと関連する言語・文化の相違が，かれらを奴隷として取りこむという形態をとらせたのである。このような過程をへて，17世紀にトンブクツーで書かれた歴史書が明言しているように，奴隷制に基礎をおく国家が西アフリカにはじめて誕生したのである [TARIKH EL-FETTACH: 107–108][10]。

マリ帝国のつぎのガオ帝国になると，奴隷による生産はさらに発展することになった。ガオの王は戦争をくりかえし，そこで捕らえた奴隷は北アフリカに輸出したほか，ニジェール川流域の穀倉地帯に連れてきて農業奴隷として活用した [TARIKH EL-FETACH: 214–215]。また王が功績のあった臣下にあたえる財も，奴隷をふくんだ一定の領土であった [TARIKH EL-FETTACH: 110, 211]。ガオ帝国においてこのように奴隷制が強化されたのには，おそらく軍事力の増強と，農業の発展による生産力の向上があったのであろう。経済学的な観点から見たとき奴隷制に課せられた課題とは，

8）マリ帝国の中核民族であったマリンケのもとで，最初に栽培された植物として高い神話的および儀礼的価値をあたえられているのはフォニオであり [DIETERLEN 1955: 60–64]，稲は「Faro（水の精霊）とともに地上にいたった水（ニジェール川）のなかに最初に生えたもの」といわれるにすぎない [DIETERLEn 1955: 69]。かれらのもとでは稲は栽培化されず，野生のままにとどまっていたのであろうか。

9）ガンビア川流域のマリンケ社会では，稲の栽培が女の仕事とされているという事実に示されているように，マリンケの農業の中心をなすのは，トージンビエ，ソルガム，フォニオ等の穀物であり，稲は好んで栽培される作物ではない [QUINN 1972: 6–7]。稲作に熱心であるセミ・バンツー系社会からみた場合，マンリケ社会との違いは，何より稲作を中心としているか「雑穀」栽培であるかの違いとして認識されているのである [PAULME 1970 (1954): 9]。

10）マリ帝国の奴隷をもちいた農業生産については [竹沢 1984: 103–104] を見よ。ガオの軍隊は15世紀の前半にマリ軍を破り，後者の所有していた24の「奴隷部族」を獲得したが，これがはじめてガオに奴隷制の導入された契機であったとされている [TARIKH EL-FETTACH: 107]。この24の「奴隷部族」とは，農業奴隷のほかに，鍛冶屋，漁民，馬丁，大工，皮細工師といった専業的な職業集団をふくんでいた [TARIKH EL-FETTACH : 20–21]。

奴隷じしんの生存とその主人の生計を維持するだけの高い生産力をもちうるかという点にある。しかしそのことはアフリカの伝統的な粗放な農業によっては困難であった[11]。そこでガオ帝国のように，稲作等によって高い生産性を実現した社会だけが，奴隷制に基礎をおく中央集権的な国家を成立させたのである[12]。

中世の西アフリカの大帝国の経済的基盤については，これまで金その他の交易のみが強調される傾向があった。その結果応々にして，これらの国家は真の経済的発展を経験せず，金や奴隷等の内部の資源を輸出することによってのみ栄えた，「略奪的」経済にもとづいた国家であると主張されてきた [Coquery-Vidrovitch 1969: 77; Devisse 1972: 369]。しかしながら，こうした解釈はいちじるしく公平を欠いているといわざるをえない。それは，中世の西アフリカで実現された経済的発展，とくに農業や手工業等の分野で見られた生産技術の発展と生産様式の根本的な改変，そしてわたしたちが以下の章で見るような，西アフリカ全土を結びあわせる交易の進展とそれによって広範囲にもたらされた文化的および社会的な革新を，見おとす危険性があるからである。

### 5) 稲その他の栽培作物にたいするイスラムの影響

北アフリカ等のイスラム世界は，西アフリカの農業文化にいかなる影響をもたらしたのであろうか。たしかに西アフリカのなかでも，トンブクツーやガオといった北アフリカとの交流がとくに深かった地域では，15世紀のレオ・アフリカヌスが書いているように，古くから小麦の栽培が導入され，パンも焼かれていた [Léon L'Africain

11) アフリカでは古くから民族集団間の争いがあり，他集団の略奪もおこなわれていた。しかし生産力の未発達な段階では，たとえばヌエルとディンカの抗争に示されているように，略奪されたディンカはヌエルの奴隷にされるのではなく，マイナーな存在としてヌエルのなかに「養取」されていった [エヴァンズ＝プリチャード 1978 (1940): 337 以下]。また社会によっては，西アフリカの森林地帯の諸社会のように，いったん奴隷の地位が与えられるが，つぎの世代で吸収・同化される家内奴隷の制度がとられたところもあった。[Meillassoux 1971: 20–22; 竹沢 1988: 37–38]。黒人アフリカにおいて生産様式としての奴隷制が確立されたのは，ここで取りあげているマリやガオ帝国，そして19世紀以降のフルベ国家やハウサ諸都市など [竹沢 1988: 38] 少数の例だけである。

12) くわしくは，[竹沢 1984: 104–108] を見よ。ガオ帝国の時代にどれほどの生産性があったかについては，残念ながら資料が欠けている。それから3世紀のちに，内陸三角洲に成立したフルベ国家において，農耕奴隷であるリマイベ稲作民は1人につき1ないし2人を養うだけの穀物を主人に提供する義務を課せられていた [Jobson 1976: 488]。モロッコ軍によるガオ帝国の壊滅後，この地に政治・経済的混乱が続いたために農業生産性の発展は望むべくもなかったことを考えれば，フルベ国家のそれはガオ帝国にもあてはめることができるだろう。ガオ帝国の中央集権的な政治組織と官僚制度については [Cissoko 1975: 97–118] がくわしい。

1956 (1526): 465, 471]。しかしそれいがいの点では，西アフリカはむしろ影響を与える側だったようである。

たとえばソルガムは，西アフリカの主要な作物の1つであるとどうじに，世界各地で生産され，今日では世界の4大作物の1つにかぞえられるほどである。その品種は今や何千とあるが，その起源は唯一の野生種 *Sorgham bicolor* にあったこと，そしてその栽培化がおこなわれたのがサハラの南縁地帯であったことについて，多くの研究者の見解は一致している [HARLAN and STEMLER 1976: 466–477; DOGGETT 1976: 112–117]（図2・3参照）。これはその後インドへ伝えられ，高収量のドゥラ種 *S. durra* を生んだ。インドで発掘された最古のソルガム（ドゥラ種）はBC 2000-1500年頃のものであり，ソルガムの伝播がかなり古い時期におこなわれたことを物語っている [NORMAN *et al.* 1984: 121]。さらにこれは中国へ伝えられてコーリャンを生み，またイスラム世界へ伝えられて広く栽培されたのもこのドゥラ種であった。

ソルガムとならんで西アフリカでよく栽培されているのにトージンビエ *Pennisetum* があるが，その栽培化がおこなわれた土地もサハラの南縁地帯にあったと考えられている（図2，3参照）。トージンビエの野生種はこれまで世界のどの地域でも見つかっていないが，栽培種の変種の数が一番多いこの土地が（西アフリカに8種，スーダンに4種，東アフリカおよびインドに合わせて6種），起源の土地と推測されているのである [PURSEGLOVE 1976: 91–93]。このトージンビエも，のちにソルガムと同じようにインドに伝えられ，BC 1000頃の地層から発見されている。しかし考古学発掘のいちじるしく遅れた西アフリカでも，BC 1200年以前のものが発見されているので [MUNSON 1976: 105]，アフリカにおける栽培化の古代性はゆるがないところであろう[13)]。

もう1つ西アフリカに特徴的な栽培種にフォニオ *Digitaria exilis* がある。これがアラブの文献にはじめて登場するのは14世紀のイブン・バツータとアル・ウマリーの記録であり，マリ帝国の主要な食物として描かれている。しかもそこでは funi と西アフリカの名称でよばれており [CUOQ 1975: 266, 298]，それ以前にはイスラム

13) マリのバンジャガラ高地にすむドゴンの宗教世界において，作物の起源にかんする伝承と高い儀礼的価値が与えられているのは，グラベリマ稲，ソルガム，ゴマ，そしてつぎにみるフォニオであり，トージンビエではない [竹沢 1987: 116]。これらの作物はトージンビエにくらべるとより湿潤な気候を好むものであり，トージンビエの栽培がのちにつけくわえられたことを推測させるものである。トージンビエの起源地は，おそらく他の西アフリカ起源の作物より乾燥化のはげしい地帯，CHEVALIER のいうように現在のサハラ砂漠の地帯にあったのであろう [CHEVALIER 1938: 315]。

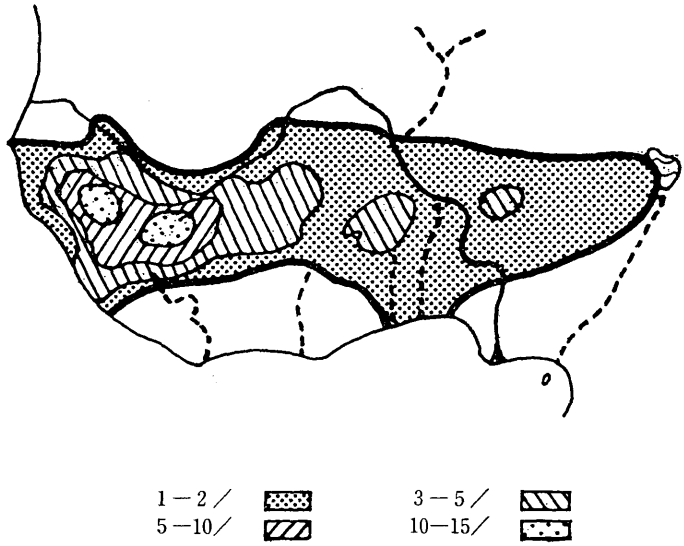



**図8**　フォニオ (*Digitaria exilis*) の栽培範囲と変種の数 [PORTÈRES　1976: 420]

世界でこれが知られていなかったことを物語っている。

ポルテールによると，フォニオの栽培は西アフリカに限られており，とりわけニジェール川上流地帯で栽培種の数がもっとも多い（図8）。またその名称を見ていくと，ほとんどの地域で funio か fundi のいずれかでよばれている。このうち fu は「もの」をあらわし，nio および di は「食物」を意味する。したがって funio と fundi はいずれも「食物」「食べる物」の意味であり，これがこの地方でもっとも古く栽培化された作物であることを示唆しているとされる [PORTÈRES　1976: 419–423]。西アフリカの各地，とくにマンデ集団の本拠地でもあったニジェール川上流地帯にはフォニオにまつわる神話がひろく存在し，それがもっとも早く栽培化された作物であるという伝承も存在する [DIETERLEN　1955: 43, 54–55; GRIAULE et DIETERLEN　1965: 106 sq.]。その意味でも，ポルテールの解釈は的を射ているといえよう。

## 2. コーラナッツとその交易

### 1) コーラナッツの栽培と価値

つぎに，古くから西アフリカの主要な交易品であったコーラナッツについて，見ていくことにしたい。

コーラナッツは人間の神経系を刺激するさまざまな成分をふくんでおり，またそのようなものとして高い価値を与えられてきた。コーラナッツの成分としては，カフェインやテーブロミン，コライン等がふくまれが [FRANÇOIS 1918: 119]，それらは大脳皮質に作用して精神・神経機能を高揚させるとどうじに，気管支の拡張や，心筋の収縮力の増強をもたらす。これらの刺激は，コーヒーをはじめ他の刺激物に共通するところがあるが，コーラナッツは面倒な準備を必要としないという点でまさっている。コーラナッツのこのような作用に着目して，それを清涼飲料水として商品化した製品が現在世界中で愛飲されていることを考えれば，その効果の大きさは理解できるであろう。

とはいっても，コーラナッツがかくもポピュラリティーを獲得するにいたったのは

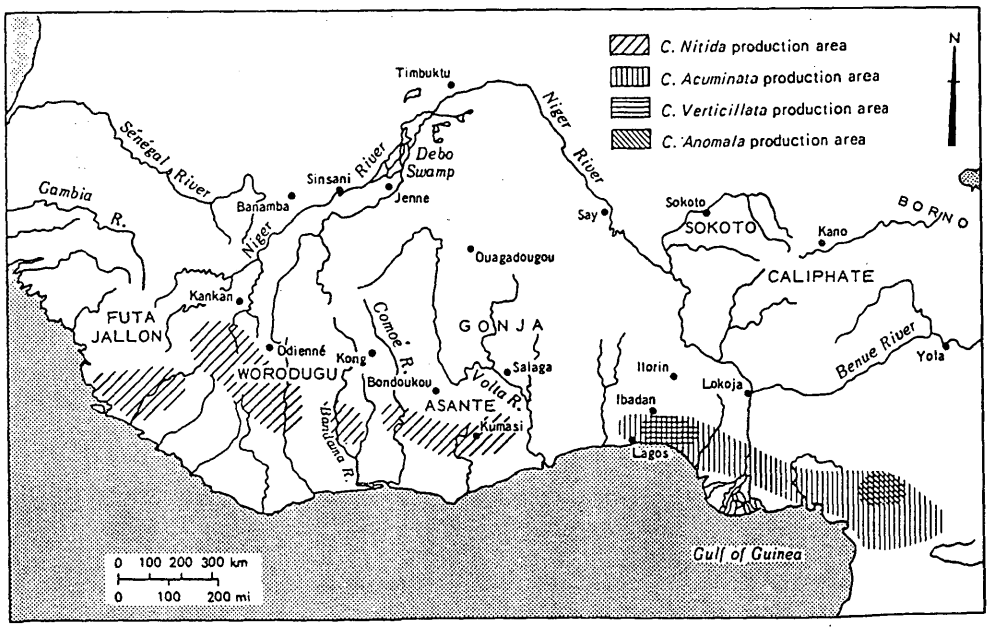



図9　コーラナッツの主な生産地 (19 C 末) [LOVEJOY 1980: 99]

ごく近年のことでしかない。ながいあいだそれは熱帯アフリカにしか存在せず，世界の他の地域に伝えられたのはようやく16世紀になってであった。1504年と1512年頃，2度にわたって西アフリカを訪れたレオ・アフカヌスは，北アフリカの人間としてはじめてコーラナッツについてふれており，それを西アフリカ流に goro と書いている [LÉON L'AFRICAIN 1956 (1526): 54]。また，詳細をきわめたイスラムの医学書にはじめてコーラナッツの記録が登場するのも，16世紀の後半のことでしかない [RENAUD 1928: 51–53][14]。

コーラナッツの起源が熱帯アフリカにあるのは，以上のことから明らかである。現在栽培されているコーラナッツは世界に約40種類あるといわれているが，そのうち重要なものは，*Cola nitida, C. acuminata, C. verticillata, C. anomala* の4種である [LOVEJOY 1980: 98]。これらの栽培地は，図9に見られるように西アフリカから中央アフリカの熱帯雨林気候帯にかぎられており，このなかでもとくに *C. nitida* に高い商品価値が与えられてきた。

とはいっても，西アフリカのどこでもコーラナッツに一様な価値が与えられてきたわけではない。人びとの嗜好には大きな地域-気候的な変差があり，コーラナッツの栽培される熱林地帯と，交易によってしかそれを入手できない北のサバンナ地帯とでは，大きな価値の相違が存在するのである。たとえば西アフリカのギニア山地東部についていえば，コーラナッツの栽培のおこなわれているクル系（アシャンティ，バウレ等）の人びとのあいだでは，それはほとんど消費さえされていない。また，その栽培にもっとも熱心であるキシ，テムネなどの西大西洋語族や，ダンやグルなどの南マンデ系でもその評価は低く，ときおり消費されるにすぎない。これにたいし，コーラナッツの栽培の不可能な北マンデ系社会や，ソンライ，ハウサなどのサバンナの住人のあいだでは高い儀礼的・社会的価値を与えられているのである [PERSON 1968:

14) 14世紀のアル・ウマリーの記録に，「黒人だけが食べる，酸っぱくて嫌な味の果実がある」という記述があり [CUOQ 1975: 268]，西アフリカ史家 MAUNY はこれをコーラナッツにかんするアラブ世界の最初の記述とみなしている [MAUNY 1961: 249]。また，西アフリカに滞在していたイタリア人商人の話をもとに1574年にナポリで出版された地理書では，ハウサのカノでの見聞として，コーラナッツとおぼしき果実についてつぎのような記事がある。「ナイル川のほとりでは黒人が sori (?) とよぶ木がはえており，それは木の形についても，その実についても（その皮をのぞいて）栗によく似ている。その実は黄色か赤で，最初は苦いが，噛んでいるうちに他のどの果物より香しく，甘くなっていく。それは黒人の王だけでなく，バルバリー（アラブ人）によっても大変評価されている。それらは大変高価なものだからである。Vincenzo MATTEO 氏は Fes の王にこれを贈ったところ，王はそれを高価な宝石のように評価した」[LANGE et BERTHOUD 1972: 339–341]。この記録を見ると，16世紀の中頃になっても北アフリカにはコーラナッツはほとんど入っていなかったようである。

102]。

サバンナ地帯におけるこのように高い評価は何によっているのだろうか。2つの理由があるように思われる。1つは，それがサバンナ地方では生産されず，しかもその輸送コストが高くつくという事実からくる稀少性である。コーラナッツは熱や乾燥に弱く，それを運搬するにあたっては木の葉で厳重にくるんだうえで，たえずその上から水分をかけて，つねに湿り気をおびるようにしなくてはならない。しかもその輸送は迅速でなくてはならず，交通路と輸送手段の未発達な時代には困難であった。その結果，サバンナ地帯においてはその価格は高いものになっていき，コーラナッツは富と権力の象徴としてあつかわれることになったのである [Trigart 1956: 211–214; Person 1968: 102]。

コーラナッツが西アフリカのサバンナ地帯で受けいれられたもう1つの理由としては，イスラム化の進展を考えるべきであろう。サバンナ地帯では，11世紀のアル・バクリーの記録にマリの王のイスラムへの回宗の記事が見られるなど [Cuoq 1975: 102–103]，かなり早い時代からイスラムが広まっており，コーランの教えによってアルコールの摂取は禁じられていた。そこでアルコールにかわる嗜好品が必要となり，コーラナッツが選ばれたのである。世界ではじめてコーヒーの飲用がイスラム世界で開始されたように，イスラム世界は非アルコール嗜好品にたいする根強い要求をもっている。コーラナッツにたいする好みも，おそらくおなじ理由によるのである。

### 2)　コーラナッツの名称の分布

南の森林地帯と北のサバンナ地帯のあいだの顕著な相違は，コーラナッツの価値にかんするだけではない。それは名称の違いにもあらわれているのである。西アフリカ各地のコーラナッツの名称の分布をもとに，その交易の歴史を再構成したものにアメリカの歴史家ラブジョイの研究がある [Lovejoy 1980]。それにもとづきながら，少し論をすすめることにしたい。

コーラナッツの自生ないし栽培のおこなわれている森林地帯の特徴は，その名称が社会ごとにいちじるしく異なる点にある。ラブジョイは西アフリカの森林地帯の32の社会の名称を比較しているが，そこでは4つ以上の社会に共通する名称は存在しないのである。これにたいし，交易によってそれを入手している北のサバンナ地帯では，その名称はおどろくほど類似している。多いのは guro, guru 系の名称であり，woro 系の名称もかなり見られる [Lovejoy 1980: 104–105]。これにもとづいて地図を作ると図10ができあがる。

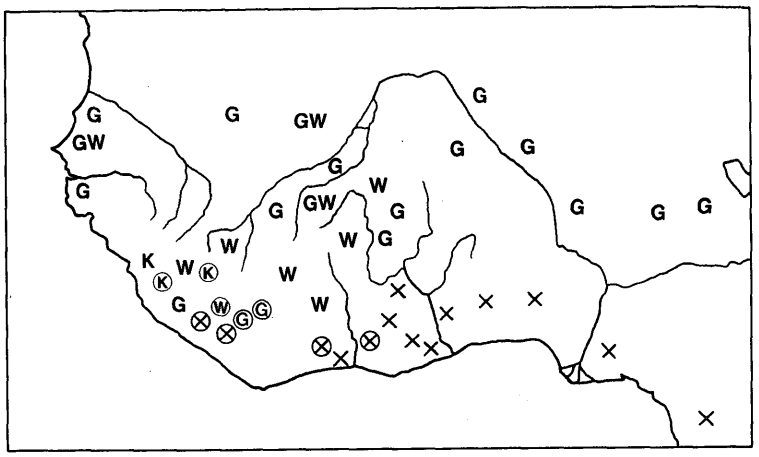



**図10**　コーラナッツの名称の分布。[Lovejoy　1980: 104–105] をもとに作図。ラブジョイのあげている63の社会のうち，K は kola 系の名称，G は Guro 系の名称，W は woro 系の名称，X はそれ以外の名称をもつ社会を示す。丸で囲ってあるのがコーラナッツの栽培のさかんな社会である。

このような名称の分布は何を意味しているのであろうか。ラブジョイによれば，サバンナ地帯における名称の共通性は，交易品としてのコーラナッツにたいする嗜好がある特定の集団で開始され，そこから他の集団へと急速に伝えられたことを物語っている。というのは，コーラナッツが痛みやすい品物であること，そして遠く離れた土地でも名称にほとんど差のないことを考慮すれば，コーラナッツにたいする嗜好は，すでに確立されていた交易ルートにのって各地に伝えられたに違いないというのである [Lovejoy　1980: 106]。

サバンナの集団のうち最初にコーラナッツの商品化をおこなったのはどの集団であろうか。サバンナにはもともとそれが存在しなかったことを考えれば，かれらが森の住人からその名称をうけとったであろうことは疑問の余地がない。このとき，西アフリカの熱帯雨林地帯のなかでもアカンやヨルバ等の社会では，生産がさかんであるにもかかわらずその名称は北部に伝えられていない（図中の×印）。これにたいし，ギニア山地の西大西洋語族に属するキシやテムネ社会では kola と，そしてその東側のグロやコノ社会（南マンデ系）では guro, wuro と呼ばれており，サバンナ地帯と共通している。こうした事実から，これらの社会で栽培化されていたコーラナッツが最初にサバンナのマンデ系交易者に与えられ，そこからさらに各地に伝えられていったとされるのである [Lovejoy　1980: 108–110]。

ラブジョイによれば，熱帯雨林地帯ではその自生ないし栽培は古くからおこなわれ

ていたが，今日にいたるまで評価が低いことに示されるように，かれらのもとではその商品化は進まなかった。これにたいし，11世紀頃からのマリ帝国の発展にともない，金を求めて南下したイスラム・マンデ集団が，金の産地でもあったニジェール川上流地帯でこれを見つけ，高い商品価値を見いだすにいたった。そしてそれはかれらの手で，西は大西洋岸のヲォロフ社会から，東はハウサ-カヌリ社会にいたる広い地域に伝えられたのである [Lovejoy 1980: 108–117]。

一方，サバンナ地帯のうちでも guro と woro という名称の相違が見られるが，それはつぎのように解釈されている。最初にコーラ・ナッツの商品化をおこなったマンデ系集団においては，発音が g→w となる一般的傾向があり，かれらのもとでもともと guro と呼ばれていたコーラ・ナッツが wuro に変化したのちに伝えられた地域では，その名称が最初から固有名詞として受けいれられた。したがって，コーラナッツを wuro と呼ぶ社会は，guro の名称をもつ社会にくらべると，マンデの交易ネットワークに組みこまれた時間が後代に属すると推測されるのである [Lovejoy 1980: 107]。

### 3) 歴史のなかのコーラナッツ

コーラナッツの交易は，古くから西アメリカのもっとも重要な交易品の1つに数えられていた。たとえば16世紀のガオ帝国の宮廷において，王がその農園の監督者に与えるのは，1000個のコーラナッツと1着の服，1枚の腰巻き，そして1枚の塩の板に定められていた [Tarikh el-Fettach : 179]。これの品々がいずれも長距離交易によって入手された品物か，王の管理化におかれていた手工業品であったことは興味深い事実である。またハウサのカノにのこる歴史書は，14世紀の後半にマリからイスラム交易者がやってきたのちに，はじめてコーラナッツがこの国に導入されたこと [Palmer 1928, III: 104, 109]，そして15世紀の中頃にカノとアシャンテイ地方を結ぶゴンジャへの道が開かれたことを記している [1928: 109]。この「ゴンジャへの道」とは，ハウサの伝統ではコーラナッツの交易ルートを意味するものにほかならないのである [Lovejoy 1980: 116]。

残念なことに，植民地化が進展した19世紀以前に，どれだけの量のコーラナッツが交易されていたかについての正確な資料は欠けている。1911年にシュヴァリエは，もっとも高い商品価値をもつ *C. nigita* の生産量が，西アフリカ全体で1万5,000トンにのぼると推定している。その内訳は，ガーナ（とくにアシャンティ地方）が5,000トン，シエラレオネとギニアがそれぞれ2,000トン，コート・ディボワール，リベリア，ポル

トガル領ギニアがそれぞれ1,000トンその他である(この時代にはナイジェリアではいまだ *C. nigita* の生産は始められたばかりであった) [LOVEJOY 1980: 124 の引用による]。この数字は20世紀になってのものではあるが，植民地化以前の実情とそれほどかけはなれてはいないであろう。というのは，この時代にはいまだ交通網が未発達であり，交易の内容に根本的な変化があったとは考えにくいこと，そしてもっとも高い生産量をほこるアシャンテイ地方では17世紀いらい強大な王国が成立していたが，その経済的基盤は一貫してコーラナッツの取りひきにあったこと [GOODY 1967: 612]，などの理由からである。

コーラナッツはなぜそれほど好んで取りひきされたのであろう。経済学的な観点から見たとき，長距離交易に適した品物とはつぎの条件をみたしていることが必要である [HOPKINS 1973: 51sq]。ある地域において，なんらかの理由により（その品物の生産ができない等の理由）需要と供給のバランスがいちじるしく崩れていること。交通の未発達な時代には輸送コストが高くつくため，輸送コストを吸収できるほどに対重量の価格が高価な品物であること。これらの条件をみたしている金や胡椒等の商品が，古代・中世のヨーロッパにおいて長距離交易をうながす主要な要因となったように，西アフリカではコーラナッツがその役割をはたしていたのである[15)]。

コーラナッツの需要が西アフリカのサバンナ地帯のほぼ全土にあったことから，その交易は各地でさかんにおこなわれていた。西アフリカの長距離交易の特徴は，1つの民族集団（そのなかでも特定の親族集団）が，買いつけから輸送，管理，販売にいたる全行程を掌握する点にあった [COHEN 1966: 19; 1971: 266–267]。そうした方法は，交易がいくつもの民族集団をこえておこなわれるという事情によるものであったが，その結果，コーラナッツの交易に主に従事する交易者集団が，西アフリカの各地に形成されていったのである（図11)。

西の大西洋岸から見ていくと，ギニア山地のコーラナッツの生産地と消費地であるセネガンビア地方をむすぶ交易を掌握していたのは，マンリケ・モリやジャカンケと呼ばれるマンデ系の交易者集団であった [CURTIN 1975, I: 69, 228–229]。17世紀にガンビア川を船でさかのぼったイギリス商人が，マリバック（イスラム導師をさす

15) コーラナッツの交易は莫大な利益をもたらしていたようである。19世紀のフランスの植民地行政官であったバンジェールは，当時の西アフリカの風俗や慣習にかんして貴重な記録を残しているが，かれによれば，Kong の町で20フランで仕入れたコーラナッツの包みを，500キロメートルほど北の Bobo-Diuolasso の町で塩の板に交換して戻ってると，12倍の値段になったという [BINGER 1980(1892): 313]。また，19世紀末のイギリスの経済報告書によれば，コーラナッツの産地に近い Gonja で仕入れたコーラナッツを約2,000キロメートル離れたチャド湖周辺に運ぶと，その50～60倍の値段で売れたという [HOPKINS 1973: 73 の引用による]。

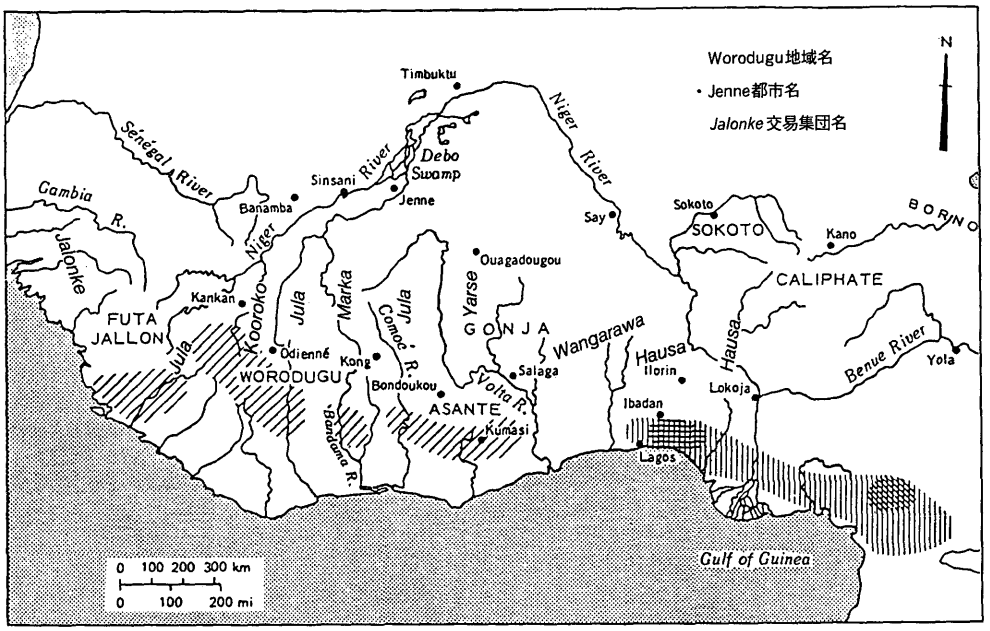



図11　コーラナッツの主な交易者集団

「マラブ」の意？）と呼ばれる黒人商人がコーラナッツの交易をおこなっていると書いており [Jobson　1904 (1623): 101]，かれらの活動はかなり古くからつづけられていたようである。そこから東の，ニジェール川に沿った交易路を統括していたのはジュラと呼ばれるマンデ系商人であり，15世紀には worodugu というコーラナッツの名称をかぶせた小国家が建設されるほどに，その交易は重要になっていた [Person 1968: 101–117]。すでに見たようにかれらがはじめてサバンナ地帯にコーラナッツをもたらしたと考えられる以上，その活動はおそらく11-12世紀にさかのぼるものと思われる。また，のちの19世紀になると，フルベ社会がジハードをつうじてこの地方に政治的・経済的覇権を確立するにおよんで，かれらのうちの鍛冶屋集団であったコーロコが交易にも従事するようになり，コーラナッツの交易者集団として形成されるにいたった [Amselle　1977: 101sq.]。

コーラナッツの生産の一大センターであったアシャンティ地方と，西アフリカの商業とイスラムの中心であったニジェール川中流域とのあいだの交易を支配していたのは，ジュラないしワンガラと呼ばれるマンデ系の交易者であり，1471年にポルトガル人がエルミナに交易拠点を開いたきたときには，かれらはすでに内陸三角洲のジェンネとのあいだに交易路をひらいていた [Wilks　1982: 333–344]。そのアンシャ

ンティの土地から真北に位置するモシの国にコーラナッツを運んでいたのは，ヤルシとよばれるおなじくマンデ系の交易者であったし [Izard 1971: 220–224]，そこからさらに東のハウサの国へコーラナッツを運んでいたのも，初期にはワンガラワとよばれるマンデ系交易者であった [Lovejoy 1978: 189–191]。このルートが開かれたのは，すでに見たように15世紀の末頃と考えられている[16)]。

### 4) イスラムの影響

コーラナッツの栽培にたいしては，西アフリカの他の栽培作物がそうであったようにイスラムの影響は存在しない。その栽培はイスラムの影響が始まるまえにすでに開始されていたからである。しかしそれが西アフリカのサバンナ全土に通用する商品とされるにあたっては，イスラムは決定的な役割をはたしたようである。コーラナッツにたいする嗜好そのものがイスラム化の進展にともなう現象であること，そして上にあげた西アフリカの主要な交易者集団がいずれもイスラム交易者であったことなどの理由からである。

南の森林地帯から北のサバンナ地帯へコーラナッツをはこぶかれらがなぜイスラムを必要としたのか，その理由についてはすでに別の箇所でくわしく検討してあるので [竹沢 1988: 34–36]，ここではその要点だけを述べることにしたい。コーラナッツの交易が生態系のことなるいくつもの民族にまたがっておこなわれた以上，その交易に従事したかれらは，民族の枠をこえたより大きな枠組みを必要としていた。というのも，西アフリカの諸社会のように伝統的な社会においては民族ごとに言語も宗教もことなっており，それが民族の外枠を定めていたからである。かくして伝統的な宗教体系は，民族の枠をこえて活躍するかれらに必要な枠組みを提供することはできなかった。そこでかれらはイスラムを受けいれることで，民族宗教の枠をこえた広い活動の場と移動の保障を獲得するにいたったのである。

このようにしてイスラムは，長距離交易者集団の形成というかたちで西アフリカの交易の進展に大きな役割をはたすことになった。そしてそのときコーラナッツは，交易に必要な商品を提供したのである。交易の進展が実現されるためには，世界の他の

16) アシャンティとハウサのあいだの交易路がハウサ交易者の手にゆだねられたのは，ようやく18世紀初頭になってであった [Goody and Mustapha 1967: 611–613; Lovejoy 1971: 538–540]。しかもラブジョイによれば，かれらはすでに確立されていた交易システムをそのまま受けいれる形で加わったにすぎなかった [Lovejoy 1971: 540]。しかし1591年のモロッコ軍の支配以降，それまで西アフリカ全土の交易と手工業の中心であったニジェール川中流域地方が没落するにおよんで，ハウサ諸都市がしだいに西アフリカの新しい経済の中心になっていき，コーラナッツの交易に従事する交易者集団も，ハウサのうちに数多く形成されるにいたった [Cohen 1966: 18 sq.; Lovejoy 1973: 635 sq.]。

地域でインド人やレバノン人，中国人等がその役割をはたしたように，交易に従事する専業的な集団の形成と，そしてすぐれた交易品の開発が不可欠である。西アフリカにおいては，前者の役を引き受けたのが主としてマンデ系のイスラム交易者であったし，後者の交易品がコーラナッツであった。いいかえれば，コーラナッツは西アフリカの交易の発展に必要な材料を提供し，イスラムはその枠組みを与えた。その2つがあいまったことで，植民地以前の西アフリカに発達した交易のネットワークが形成されることができたのである[17)]。

交易の進展によって言語も制度もことなる社会のあいだに文化の交流がもたらされ，それをつうじて社会の経済的および社会的成熟が実現されたことは，世界史上の常識である。そうした意味で，イスラムとコーラナッツは，西アフリカの交易の発展に寄与しただけでなく，経済的および社会的な成熟にも大きく貢献したといってもよいであろう。

## 3. 綿と毛の2種の布の生産

### 1) 織機の種類

アフリカ大陸ではさまざまな種類の織機が古くから用いられてきた。その構造や使用法については，すでにくわしい研究が数多くあるので，ここでは取りあげない。ここで問題にしたいのは，その起源と伝播，そしてそれがはたした歴史的役割である。

アフリカ大陸に古くから存在した織機の分類については，ロートの古典的な研究がある。かれはそれを4種類に分類しているが，そのうち西アメリカでみられるのは，綜絖のない，縦糸を固定したタイプの垂直機と（図12），足踏みペダルで綜絖を上下させるタイプの水平機である（図13）[Roth　1950 (1918): 26, 63]。このうち，前者の垂直織機は世界中の伝統社会に広く見られる型式のもので，西アフリカではナイジェリア南部より東南のバンツー系社会に広く存在する。それは固定した縦糸に横糸を通していく型式のもので，主としてラフィアヤシ等の長繊維を織るのにもちいられる。西アフリカでももっとも古いタイプのものと考えられている。

これにたいし，足踏みペダル式の水平式の織機は，綿糸や羊毛等の短繊維を織るの

17) 15世紀以降，金の交易を独占しようとして海路西アフリカにいたったポルトガル交易者は，各地でマンデ系の交易者と競合するにいたった。かれらの記録が驚きをこめて伝えているように，1471年にかれらが現在のガーナのエルミナの地にいたった時には，当地と，当時の先進地帯であったニジェール川中流域とをむすぶ交易路がすでに完成していたし，そのルートはさらに西のセネガンビア地方までのびて，そこをマンデ交易者は自由に往来していたのである[Fernandes　1951 (1506–10): 47; Pacheco Pareira　1956 (1506–08): 123–125]。

にもちいられるものである。それは一般に2枚の綜絖をそなえ，これを両足のペダルで操作して縦糸を上下させ，そこに両方の手で交互に杼をとおして横糸を織りこんでいく。しかも西アフリカに見られるこのタイプの織機は独特の構造をもっており，綜絖の幅がきょくたんに狭いこと（多くのばあい5～25センチメートル），分解・組立てのきわめて容易なこと，縦糸のはじに石の重りをのせて縦糸に緊張をあたえていることなど，他に類を見ないユニークな特徴をもっている[LAMB 1975: 74]。

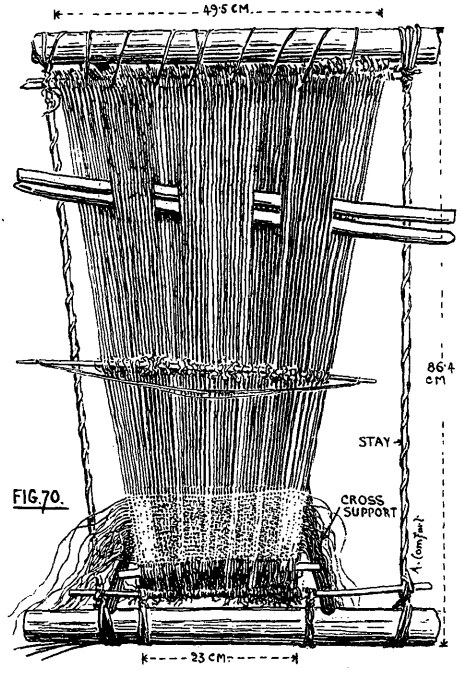


図12　バグ族の垂直式織機 [ROTH 1950: 35]

ロートの分布図が示すように，このタイプの織機は世界中でサハラ以南の西アフリカにのみ存在するものである（図14）[ROTH 1950 (1918): 71]。しかもその中でも一部の社会だけがこれを活用しており，その使用がさかんな社会は，マンデ，ハウサ，フルベ，アシャンティ，ヨルバなど，植民地化以前に交易の進展を見た社会にかぎられている。またこの2つのタイプの織機がともに存在するナイジェリア南部などの社会では，垂直機をもちいて布をおるのは女の仕事，水平機をもちいるのは男の仕事というぐあいに，歴然とした分化がみられる[18]。こうした事実は，足踏みペダル式の水平機が，垂直機の浸透したのちに発明ないし導入されたものであることを推測させている。

このタイプの織機の起源については，これまで多くの研究者がさまざまな見解を述べてきたが，いまだに統一的な見解は成立していない。それゆえ，その問題にとりくむためには迂回をして，このタイプの織機で織られる材料について検討しておくことが必要であると思われる。綿糸と羊毛がどこからもたらされたかという問題である。

18）北アフリカにおいても，可動式の2枚綜絖の織機は男だけがもちいるものであり，女は今も固定式の織機をもちいて布を織っている [PICTON and MACK 1979: 102]。

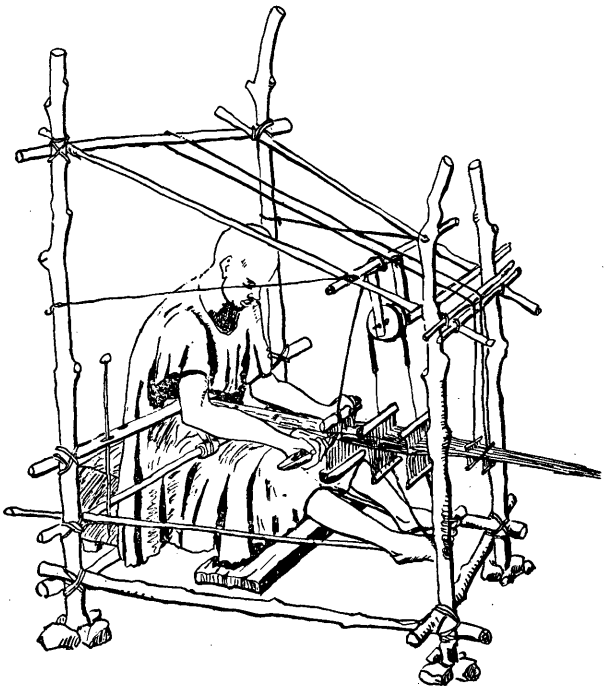


図13　足踏みペダル式の幅の狭い水平式織機 [HEUZEY　1941: 147]

## 2)　綿花と羊毛の起源

足踏みペダル式の織機が織るのは主として綿糸であるが，この素材の起源についても諸説がある。ワタは繊維としてもちいられるだけでなく，油科植物としても活用されるため，その分布は世界中に広まっているからである。アフリカにおいても，熱帯雨林地帯には野生種 *Gossypium anomalum* が存在し，そこでのワタの名称はじつに多様である [KAWADA　1988: 41]。熱帯アフリカの各地で，それがまず食用としてもちいられてきたことが推測されるのである。

問題は，繊維としてもちいられるワタの方である。アメリカ大陸から新しい種がもたらされる以前，旧世界で繊維として活用されてきたワタは2種類あった。アルボレウム種 (*G. arboreum*) とヘルバケウム種 (*G. herbaceum*) である。旧世界でこれまでに発掘された綿布のうち，最古のものはインドのモヘンジョダロの遺跡で見つかったものであり，アルバケウム種のワタをもちいて布にしたことが確められている。およそBC 2000年頃のことである [WATSON　1983: 35]。またそのほかにも，インドでは綿布の記録はたいへん古くから存在し，BC 5世紀には国家の管轄下に置かれて輸出さ

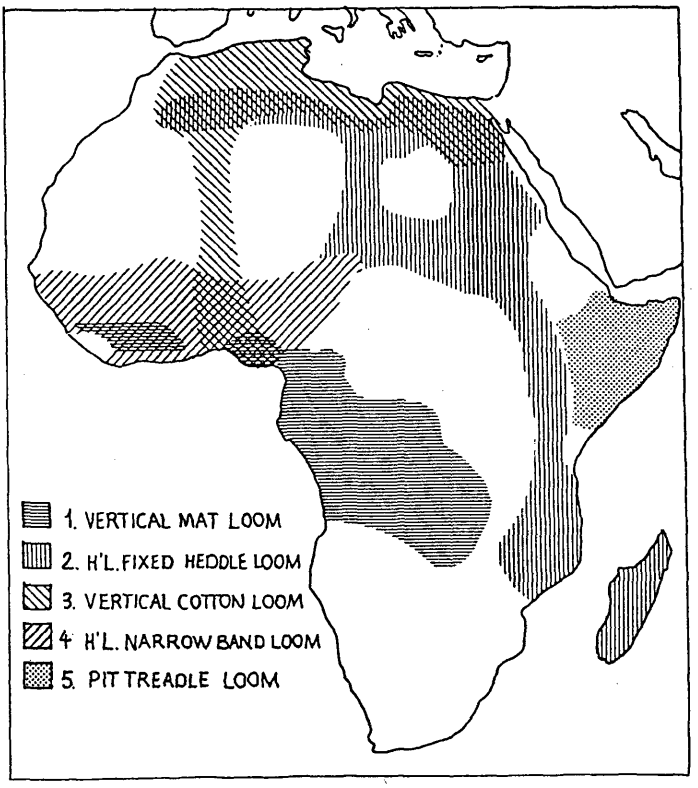



**図14**　アフリカのさまざまなタイプの織機の分布
図中の1が垂直式織機，4が幅の狭い水平式織機である [Roth　1950: 63]

れていたことが知られている。以上のことから，インドではじめてこの種のワタの栽培と綿布の生産がおこなわれたことは確実と見られている [1983: 35]。

インドの初期の文献がすべて「綿の木」と書いているように，この種のワタは最初多年性植物であり，冬の寒さを越すことができないため，その栽培は熱帯地方にかぎられていた。ワタの栽培が熱帯から出たのは，記録では6-7世紀に中央アジアのトルファン地方が最初であり，そこから旧大陸の各地に伝えられていった。中国や日本に伝えられたのもこの種のワタ，ヘルバケウム種のワタである [1983: 38–39]。

一方，アフリカ大陸では，布の生産は古エジプト王朝の時代から始められていたが，もちいられる材料は主として麻であった [Lombard　1978: 45]。エジプトではじめて綿布が出土するのは，ミイラをくるむ麻布にまぜて織ってあったのが最初であり，紀元前後のことである [Cockburn　1975: 1158–1159]。しかしその後も，北アフリカやヨーロッパ世界での織物の主流は麻と羊毛でありつづけ，ワタの栽培と綿布の生

産が本格化したのはずっと後の時代でしかない [LOMBARD　1978: 70–71]。

サハラ以南の地域には，すでに見たようにワタの野生種が存在する。しかしそれは繊維の短いアノマレウム種であり，布を織るには不向きであった。またそれは，他の2種のワタとの混種ができないほど大きくことなる種である [WATSON　1983: 31–32]。かくして，西アフリカで綿布の生産が開始されたのは，インド起源のワタがエジプトを経由して伝えられて以降と考えられているのである [*ibid.*: 41; LOMBARD 1978: 75–77] [19]。

これまでに西アフリカで発見された綿布のうち，もっとも古いものはドゴンの先住民族とされるテレムの遺跡から出土したものである。その報告書によれば，11世紀以降大量の綿布と毛布が発掘されており，とくに綿布は，現存する幅の狭い織機で織られたものと同一であるところから，現地で生産されていたと推測されている。また毛の布の一部は幅 65 cm と広いものであり，北アフリカから運ばれてきたものであろう [BEDAUX and BOLLAND　1980: 9–13]。おなじような綿布は，ドゴンの土地から真東に2000キロメートルほど離れたカネムの土地でも発見されており，正確な年代は測定されていないが10世紀以降と考えられている [URVOY　1949: 20]。したがって，この時代までに，サハラの南縁地帯で広く布の生産がはじまっていたことが十分推測されるのである。

もう一つの素材である羊の毛について，北アフリカでは古くから生産されていたことが知られている。ローマ帝国の時代からスペインやエジプトは良質の羊毛の産地として有名であり，麻とならんで織物の主要な素材であった [LOMBARD　1978: 23–35]。一方，西アフリカ地域でも，植民地化以前からマッシナ種と呼ばれる羊毛を産する羊が存在していたことが知られており，これはフルベ牧畜民の機織り集団であるマッボの手で布にされていた。それは主として遊牧フルベがはおる，カサ (kassa) と呼ばれる厚手のマントに仕立てられるほか，ニジェール川中流域のグンダム付近では，長さが8メートルにもおよぶ良質の壁掛けアルキレ (arkile) も作られている。これはとくに新婚の夫婦の寝室を飾るのにもちいられ，そのようなものとして婚姻の給付に重要な役割をはたしてきた [HENRY　1908: 191]。

このマッシナ種の羊の起源はどこであろうか。一時はこれが西アフリカ原産であり，良質の羊毛を産するメリノ種の先祖と考えられたこともあった [PIERRE et MONTEIL

19) 研究者の一部には，ワタの起源を西アフリカにもとめる見方もある [PURSEGLOVE　1976: 299]。しかしのちに見るように，西アフリカのとくにサバンナ地方のワタの名称がアラブのそれと類似していることを考慮すると，少なくとも繊維用のワタについては北アフリカからの影響を考えるべきであろう。

1905: 154]。しかし今日では，これは小アジアからエジプトをへて連れてこられた種であることは定説になっている [CURASSON 1932: 24–25]。しかもそれは，ニジェール川内陸三角洲周辺でフルベ牧畜民によってのみ飼育されているところから，かれらが北アフリカ（あるいは中東地域）から移動してきた時に一緒に連れてきたという説が有力とされている [1932: 24–26; DOUTRESSOULLE 1947: 191–192]。

しかしながら，もしそれがフルベ牧畜民の移動にともなってもたらされたものであるとすれば，なぜその分布がニジェール川内陸三角洲とその周辺に限られているのであろうか（図15）。フルベ民族は西アフリカのサバンナ地帯のほぼ全域に広く分布しており，布の材料となる羊毛にたいする需要はどの土地でも大きかったはずである。したがって，かれらがもしそれを小アジアから連れてきたとすれば，その分布は西アフリカ全土におよんでいたはずであろう。ところが現実には，それは西アフリカのごく一部の地域に限られている。そうであれば，この種の羊はかなりのちの時代になってはじめて導入されたものと考えるのが適切であろう。ニジェール川中流域地帯は古くからサハラ交易の南の起点にあたり，また1591年からはモロッコ勢力の直接支配のおよんだ土地でもあり，北アフリカの資源や物資がもたらされたことは容易に想像できる。この種の羊もおそらくこうした交易ルートにのって導入されたのであり，その時期が比較的のちの時代であったために，他の地域に伝えられることなく，今日にいたったのではないだろうか[20]。

### 3) 西アフリカの足踏みペダル式織機の起源

アラブの記録にはじめて西アフリカの布の記述が登場するのは，10世紀末のことである。それまでの記録では，たとえばイブン・ファキーフ (Ibn al-Fakīh) が903年にガーナ帝国の住人について，「かれらはこの地方に沢山いるひょうの毛皮を着ている」[CUOQ 1975: 54]と書いているように，ほとんど裸か，せいぜい動物の皮を身にまとったものとして描かれている。これにたいし，10世紀のアル・ムハッラビーは，イスラム化したガオの王が長上着を身につけ，ターバンを頭に巻いていることを記録しているし，11世紀のアル・バクリーは，イスラムの影響の強かったガーナ帝国におい

20) 時の植民地政府は，フルベの飼っているこのマッシナ種の羊の毛を利用しようとして，1906年から積極的にその買いつけをはじめ，1910年年代にはその量は，年平均500トンにのぼっていた [HENRY 1908: 324; CURASSON 1932: 98–100]。500トンといえば現地で生産されるマント（カサ）が1枚約2キログラムであるので，25万枚に相当する。これに現地で自家消費されている分をくわえると，マッシナの羊毛の生産能力にはかなりのものがあったことがわかる。この種の羊の導入が比較的近年のことでないとすれば，その分布がこの地方に限られていることを説明するのは困難である。

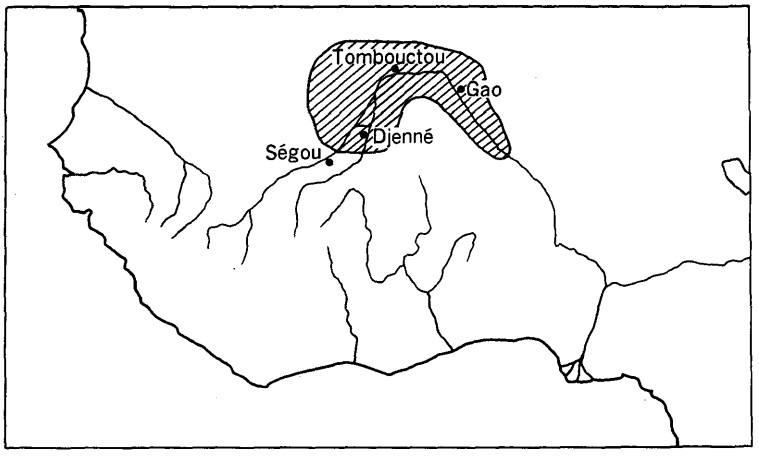



**図15**　羊毛を産するマッシナ種の羊の分布 [CURASSON　1932: 16]

て，王とその後継者だけが縫った服を着用し，他は綿や絹の腰巻きを身につけていると書いている [1975: 77, 100]。こうしたことから，初期の研究書においては，西アフリカへの布の導入がイスラムとともにはじまったとされていたのである [MAUNY 1961: 343–344]。

その後研究の進展によって，上に述べたような西アフリカの織機の独自性が明らかにされるとともに，その起源についても単なるイスラム一辺倒ではない考え方があらわれてきた。起源については諸説があるが，おもなものは以下のとおりである。

1. 独立説。織機のタイプがことなる以上，西アフリカがそれをイスラム世界から受けとったのではないことは明らかだとする。しかしそれがだれの手で開始されたかについては，言及しない [MONTEIL　1927: 10, 72; LAMB　1975: 74]。
2. フルベ起源説。フルベが「中東からの移動」とともに，西アフリカにこの種の織機をもたらしたとする。その論拠とされるのは，フルベが中東から移動してきたとすれば，かれらは布を織る技術をすでにそこで手にいれていたはずであること，そしてかれらだけが所有している羊毛が綿よりもはやくから布におられた素材であると考えられることである [BOSER-SARIVAXÉVANIS　1972: 141; 1977: 308–311][21]。
3. マンデ起源説。西アフリカの各地でもっとも機織りに熱心なのはマンデ系諸民族であり，かれらがシエラレオネ等に現存する縦糸を固定したタイプの水平織機

21) ヴュイエは，ワタについてもフルベがはじめてシリアからもちこみ，これを織機とともに他に伝えたと考えている [VUILLET　1920: 52–55]。

から可動式の織機を開発して，他に伝えたとする [SCHAEDLER 1987 (川田の引用による，KAWADA 1988: 78)]。

これらの説は，残念なことにいずれも決定的な説得力を欠いている。もしフルベがこのタイプの織機をもたらしたのであるとすれば，すでに検討したように，その材料である羊毛は西アフリカのもっとも広い地域に分布していたはずである。また，フルベあるいはマンデがこの織機の導入に決定的な役割をはたしたとすれば，その名称は他の社会にも伝えられ，かなりの共通性をもっていたであろう。しかし川田順造が明らかにしているように，このタイプの織機のもっとも重要な部分である綜絖の名称は，サハラ南縁のマンデ系，ソンライ，ハウサの社会を比較しただけでも，それぞれ niire, dange, alleeraa と大きくなっている [KAWADA 1988: 40]。したがって1つの共通の起源を考えることは困難なのである。

起源を考えるうえでのもう1つ重要な問題は，同じくこのタイプの織機の重要な部品である足踏みペダルである。このペダルは古代のヨーロッパや中東には存在しなかったため，そこでは長いあいだ織機にもペダルを使用しないタイプのものがもちいられていた。古代中国で発明されたペダル式の織機が導入されたのは，中東ではヘレニズム期以降，ヨーロッパ世界では早くても11世紀以降でしかないのである [ENDREI 1968: 29; LOMBARD 1978: 230–231] (図16)。このようにペダルの導入がのちの時代であるとすれば，フルベ起源説にせよマンデ起源説にせよ，いずれも根拠が薄弱であるといわなくてはならない。

それでは，西アフリカに特有のタイプの織機はどのようにして開発ないし導入されたのであろうか。近年川田順造は，西アフリカのいくつかの社会の織機やワタの名称

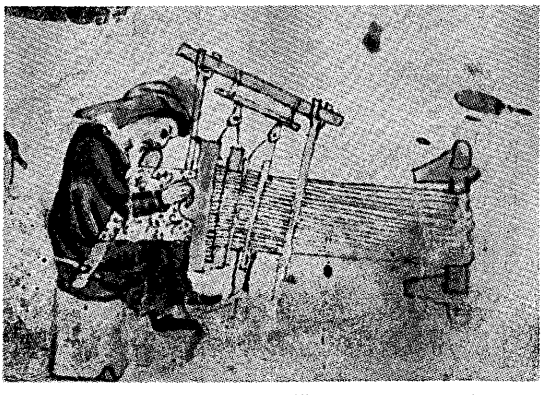


**図16**　足踏みペダルをもちいた織機のヨーロッパ最古の絵
Job de Byzance の手稿 (1368) より [ENDREI 1968: 67]

を比較して，その起源に達する試みをおこなっている。それによれば，西アフリカの機織りの集団として名高いマンデ系，ソンライ，ハウサの3つの社会において，綜絖の名称はそれぞれ niire[22], dange, alleeraa であり，大きな違いをみせている。この中では，マンデの niire がモロッコの nira ときわめて近く，またアラビア語では NWL の音が一般に水平機をあらわすことから，モロッコ方面からの伝播の可能性が高いとされる [KAWADA 1988: 40]。

一方，ワタの名称についても，マンデ，ソンライ，ハウサのそれは，それぞれ korne[22], haabu, awudga ないし kuda であり，たがいに大きくことなっている。川田はこのうちのマンデの名称が，アラブの qton からソニンケの kotole をへて koori に変化してきたと考えており，ここにも伝播の可能性はあるとする [1988: 41]。しかし，川田自身が認めているように，ワタについても綜絖についても，他の2つの社会の名称の由来は不明なままである。

それではどのように解釈すべきであろうか。ワタの名称についていえば，マンデのそれがアラブの影響を受けているように，ソンライの haabu もまたアラブの utb, hatb [SERJEANT 1972: 52, 133] からきていることは明らかである。一方の綜絖については手元に資料がない。ただ，ワタや足踏みペダル式の織機がアラブ以東の地で作られたことが明らかであるとすれば，それがエジプトに伝えられたヘレニズム期以降に，北アフリカをへて西アフリカの諸社会にもたらされたものであることは疑いの余地がない。しかしながら，ワタについても綜絖についても，その名称が上の3つの社会でいちじるしくことなっていることは，重大な示唆をふくんでいる。少なくともその差異は，これまで見てきた稲やコーラナッツの名称の類似性と比較したとき，きわめて顕著なものと映るのである。

もしワタや織機がある特定の社会集団から他に伝えられたのであったならば，その名称はもっと類似していたであろう。ところがその名称がこれだけことなる以上，アラブ人による北アフリカの制覇が完了したのちにもたらされたと考えることはできないであろう。アラブ人とイスラムは8世紀半ばには北アフリカを席巻したが，それ以前もそれ以降も，サハラの交易路はベルベル諸王国の手ににぎられていた。しかも北アフリカと西アフリカを結ぶ3本の交易ルートはそれぞれ別の勢力下にあり，その支配をめぐって争いは絶えなかった [LOMBARD 1971: 71–77]。こうしたことを考えると，ワタとこのタイプの織機は，北アフリカにアラブの影響の強まった8世紀の前

22) むしろ綜絖については niri ワタについては koori, と記すべきであろう [BAILLEUL 1981: 151, 246]。

後に，いくつかのことなるルートをつうじて西アフリカに伝えられたものであろう[23]。しかし北アフリカ伝来の織機は，ヨーロッパ最古の足踏みペダル式織機の絵がしめすように（14世紀，図16），おそらく現在西アフリカでみられるような幅の狭い型の織機ではなかった。それを西アフリカの人びとが以下に見るような社会の実情によく合うように改良して，今の形に開発したのではないだろうか。

西アフリカにおける織物の古代性についてはいくつかの社会の神話が語っている。たとえばドゴン社会では，機織りの技術は，長繊維を編んでつくる腰蓑のつぎにもたらされた2番目の「ことば」とされ，太鼓や火，農業といった他の文化的事象の出現より先に位置づけられている［グリオール　1981 (1948): 37 以下］。またその隣のバンバラ社会の神話でも，機織りの技術の出現は文化の出現と同一視され，しかも農業の開始以前に位置づけられている［Dieterlen　1950: 102–104］。これらの社会は，必ずしも衣服と結びつかない非イスラム的伝統を長く保存してきた社会であり，西アフリカにおける機織りの技術の古代性を証明するものといえよう。

### 4）歴史のなかの布

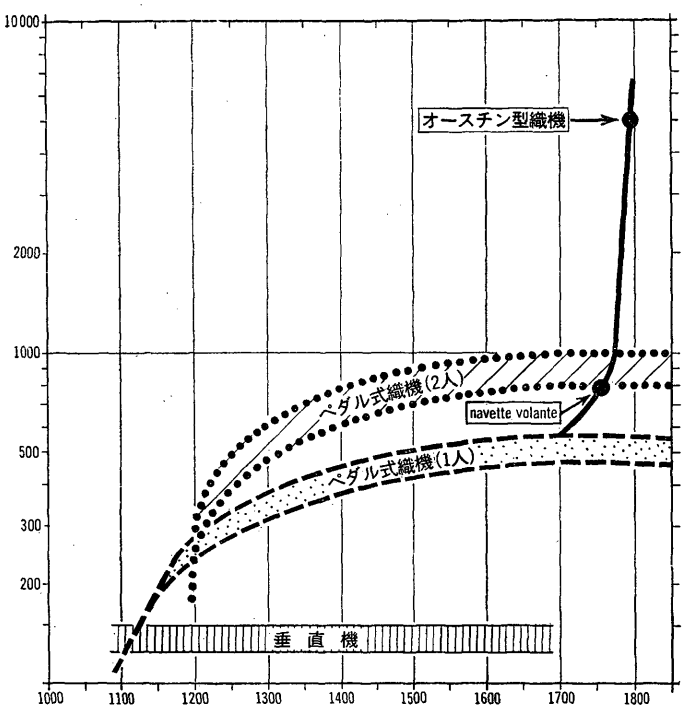
先に見たように（図14），幅の狭い足踏みペダル式の織機の分布は西アフリカだけであるが，その中でもそれを好んでもちいる社会は限られている。それは，マンデ系，フルベ，ハウサ，アシャンティ，ヨルバといった，植民地化以前から商業の盛んであった社会である。

この中でももっとも大きな影響力をもったのはマンデ系集団であった。かれらの活動の拠点となったニジェール川流域のうち，ジェンネやトンブクトゥなどの都市は綿布の生産で名高く，16世紀のレオ・アフリカヌスによれば，ジェンネの商人はベルベル人とのあいだでおこなう綿布の取り引きで多大な利益を上げていた［Léon l'Africain　1956 (1526): 465］。おなじ時期に，トンブクトゥには26軒の綿織物屋が存在し，それぞれが50人から100人の徒弟をかかえて生産にはげんでおり［Tarikh el-Fettach: 315］，それは西アフリカ全土のみならず，サハラをこえて北アフリカにまで輸出されていたのである［Léon l'Africain　1956 (1526): 37, 465］[24]。

しかし，かれらの活動はニジェール川流域に限られていたわけではなかった。わたしたちが前章で見たように，かれらはコーラナッツとともに，イスラムと織機をもっ

23) 序のところで見たように，北アフリカと西アフリカのあいだでは何本かの交易ルートが走っており（図1），イスラム以前からの長い歴史をもっていた。これらの交易ルートのうち主なものが，西マグリブとマンデ，東マグリブとガオ，エジプトとハウサを結ぶ3本のルートであったことは，きわめて示唆的であると思われる。

て西アフリカ各地に展開していたのであり，かれらの活動はほぼ西アフリカ全土におよんでいた。たとえば，かれらの本拠地のすぐ南に位置するセヌフォ社会にこのタイプの織機を伝えた集団はジェラと呼ばれ，今日にいたるまでこの地方の機織りの仕事




GRAPHIQUE 3.
Évolution du rendement du tissage
(exprimé en mètres de trame insérée par heure et par tête).

**図17**. ヨーロッパにおける織機の発表

足踏みペダル式の幅の狭い織機は，13～14 C には完成を見，18 C に産業革命がおこる以前にはもっとも効率のよいものの1つであった [ENDREI 1968: graphique 3]

24) このマンデの織る布は，西アフリカの広い範囲で高く評価されていた。15世紀後半に船でギニア湾岸に達したポルトガル交易者たちは，金を入手するために最初ポルトガルの布を，ついで北アフリカから運んだ布を持ちこんだが，この地方ではマンデ交易者が北方からもたらす綿布の方の評価が高かったため，ついにはこの取り引きを断念せざるをえなくなり，現在のナイジェリア，コンゴの土地から奴隷を船ではこんで，それと交換に奴隷を入手するにいたった。この点については，[RODNEY 1958: 274;WILKS 1982: 464–465] がくわしい。また，西アフリカの綿布は，西アフリカや北アフリカに広まっていただけでなく，一部はヨーロッパ世界にも輸出されていた [NICOLAS 1958: 266–268; RODNEY 1980 (1970): 181–183]。しかもこの布を織るのに用いられていた足踏みペダル式の織機は，単純な構造ではあってもすでに完成されたものであり，図17が示すように産業革命以前にはもっとも生産効率の良いものの1つであった。これらの事実を考慮すれば，アフリカ諸社会の経済を「略奪的」ないし「停滞的」とのみ形容するのが危険であることは明らかであろう。

を独占している [HOLAS 1957: 69]。その東のモシの国にむかった集団はヤルシとよばれ，やはり織物の技術を最初にこの国に伝えたとともに，今日までその仕事に従事している [IZARD 1971: 219–220]。一方，ニジェール川から西にむかった人びとはジャロンケと呼ばれ，セネガンビアにこの機織りの技術を伝えたし [CURTIN 1971: 235]，西南のギニア山地にむかった集団はマリンケやジェラとよばれ，スス，コランコなどの南マンデ系の社会にはじめてこの技術を導入した [RODNEY 1975: 283]。

かれらはなぜこのようにして織機をもって各地に移動したのであろうか。かれらはなぜジェンネやトンブクトゥなどの都市で織った布を，他に輸出することで満足しなかったのであろうか。おそらくそこにはかれらの戦略的な選択があったように思われる。1つの理由は，すでに見たように前近代の社会では輸送コストが高くつくため，特定の地域で織った品物を他に運ぶより，織り手みずからが移動した方が安くつくということである。もう1つの理由は，かれらの活動がいくつもの民族集団にまたがっておこなわれていたため，その交易ルートはつねに分断される危険性にさらされていたことである。かれらはおそらく金やコーラナッツを手にいれるための武器に布を活用したが，それを遠方から運んでいたのでは入手できなくなる可能性があった。そこでかれらみずから交易ルートの最前線に住みこみ，そこで布を生産することで，商品とルートの確保を試みたのではないだろうか[25)]。

イスラムは衣服の着用を要求する文化であるところから，西アフリカにおけるイスラムと衣服の強い結びつきを説く研究者は多い [MONTEIL 1927: 12; MAUNY 1961: 245]。それはたしかに1つの事実であろう。しかし布と衣服にたいする嗜好がイスラムの範囲をこえて，広い地域で成立していたのもまた事実なのである。たとえばモシ社会は，今日にいたるまでイスラムの影響の少ない社会であり，王は非イスラム的な宗教体系の頂点に位置づけられてきた。しかしそこでも王の即位にさいしては，この地方のイスラム集団であるヤルシが，白い綿の頭巾と衣服を王に着用させるのである [川田 1981: 39]。同種の行為は，モシのさらに南部のマンプルシ社会でも [LEVTZION 1968: 133]，その西に位置するシエラレオネのいくつかの非イスラム

25) このことは逆に，輸送コストの低減と交易ルートの安全が確保された時には，都市における大規模な生産がおこなわれうることを意味している。すでに見たように，マリやガオの大帝国が成立して広域の支配がおこなわれた中世の一時期には，ジェンネやトンブクツーなどの大都市での綿布の生産は飛躍的に発展していたし，西アフリカの諸社会が全体的な発展を迎え，いくつもの国家の成立と交易の進展が見られた19世紀には，ニジェール川流域やハウサ諸都市では奴隷をもちいた大規模な綿花栽培と綿工業がおこっていた [ROBERTS 1984: 232–246; BARTH 1966 (1866), I: 510 sp.]。

社会でも [SKINNER　1978: 61], 報告されている。その意味で，戦略的な商品としてこれを活用したマンデ集団の狙いは，見事に的中したわけである。

### 5)　布の生産とイスラムの影響

今まで見てきたところから，イスラムが西アフリカの諸社会で織物の普及に大きな役割をはたしてきたことは間違いない。そしてそれは2種の意味においてであった。まず，イスラムは衣服の着用をその信徒にたいして求め，それをつうじてそれへの嗜好がイスラムの範囲をこえて広まったことである。さらにイスラムは，前章で見たようにそれにしたがう交易者集団を育成し，伝統的な民族宗教では与えることのできない広い枠組みを用意することで，かれらの活動を容易にしたことである。機織りの技術を手にしたかれらは，言語も慣習も異なる人びとのあいだに容易にはいっていくことができたのであり，それをつうじて西アフリカの多くの社会にさまざまな影響をもたらしたのであった[26]。

一方，外部の勢力としてのイスラムの影響はどうであったか。衣服にたいする嗜好がまずイスラムに結びついていた以上，それをもたらした北アフリカのイスラム勢力の影響は大きかったというべきであろう。また，イスラム以前か以後かを決定することが今の段階では不可能であるとしても，西アフリカへの綿花と足踏みペダル式織機の導入が北アフリカを経由していたことはほぼ確実であり，この点においても北アフリカの影響は決定的であったと思われる。おそらく西アフリカは北アフリカ-イスラム文化を経由して衣服の嗜好とその製作の技術を受けとったのであり，それをつうじて精神文化と物質文化の2つの形式の大きな変革を実現したのである。

## 4.　しばり舟とくりぬき舟

### 1)　西アフリカの舟の種類

西アフリカにはさまざまなタイプの舟が存在していた。中世から近世にかけてこの地をおとずれたアラブやポルトガルの旅行家・交易者の記録や，近世になってからのヨーロッパの探検家や植民地の記録は，そのくわしい記述を今に伝えている。

西アフリカの舟についての最初の記述は，12世紀のものである。ガーナ帝国につい

26) イスラム交易者たちは，布を織る技術をもたらしただけでなく，他の手工業の発展にも大きく貢献した。とくにかれらは西アフリカの広い範囲に，鍛冶や土器作り，金属加工，金山の開発等の手工業をもたらしたとともに，その育成をおこなった。この点については，[竹沢　1988: 25] を見よ。

ての記述のなかでアル・イドリーシー (al-Idrīsī) は，ナイル川（ニジェール川のこと）の流域では漁や移動のために「堅固に作った舟」を用いていると書いているが [CUOQ 1975: 134]，これはしばり舟のことをさしているように思われる[27]。ついで14世紀になると，イブン・バッータの記録があらわれる。かれはマリ帝国の首都を訪れたのちに，北アフリカに戻る途中でトンブクツーからガオまで舟にのっているが，それは「一片の木をくりぬいた小さな舟」であった [1975: 315]。

ヨーロッパ人のアフリカ経営の本格化する19世紀になると，さまざまな舟についてのよりくわしい記述があらわれてくる。18世紀末にセグー王国の首都をおとずれたマンゴ・パークは，ニジェール川を往来する大量のくりぬき船を見ているが，そのなかのあるものは「くりぬいた2本の大木を縦に長く結びあわせたもの」であった [パーク 1978 (1907): 191]。また，ヨーロッパ人としてはじめてトンブクトゥをおとずれて生還したルネ・カイエは，ジェンネからトンブクツーまで舟にゆられているが，それは「現地の縄で板を結びあわせてつくったしばり舟」であり，そのうちの1つは長さ30メートル，幅4メートル，高さ2メートルという大きなもので，米や布，コーラナッツなどの積み荷のほかに，4,50人の奴隷をはこんでいた [CAILLIÉ 1979 (1828), II: 171]。一方，フランスの軍人であったバンジェールがコート・ディボワールで見たのは，細枝で作った枠のうえに皮を張った小さな舟であったし [BINGER 1980 (1892) II: 81]，舟を作るための木のほとんどないチャド湖では，今日にいたるまでパ

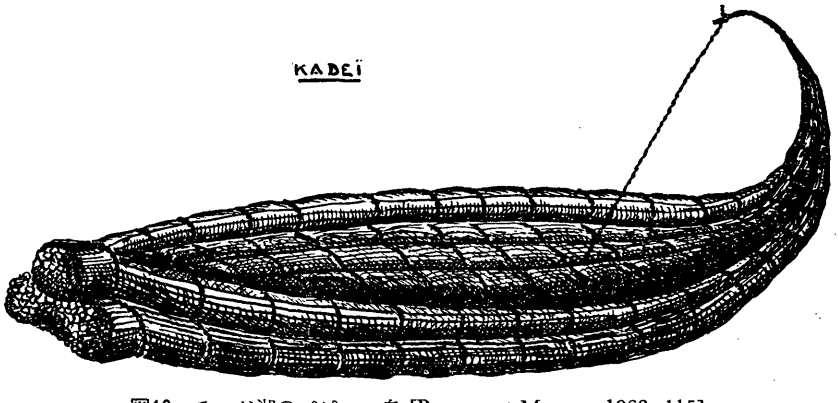



図18　チャド湖のパピルス舟 [BLACHE et MITON 1963: 115]

27) この記述がしばり舟をさしているのは，本当らしく思われる。というのは，16世紀のポルトガル人交易者フェルナンデスは，サハラ砂漠のモール人のもとでしばり舟を見ているからである。それは1枚の底板の上に2枚の側板を綱で結びつけ，さらに前と後ろに2枚の板をゆわえて作ったものであった [FERNANDES 1938 (1506–07): 117]。このタイプのしばり舟は18世紀になってもセネガル川流域でもちいられていたことが，当時のフランス人植民者によって報告されている [LABAT1728, II: 84 (Fernandes 1938 の訳者の引用による 1938: 170)]。

ピルスでつくった舟が見られるのである [BLACHE et MITON　1963: 120] (図18)。

これらの舟のうち，植民地以前の西アフリカでもっともよく用いられていたのは，他の前近代社会どうようくりぬき舟であった。15世紀以降，西アフリカ沿岸地帯にやってきたポルトガル交易者が各地で見たのはこれであり，そのなかには120人もの人間を同時に運ぶことができるほど大型のものもあった [FERNANDES　1951: 29, 95][28]。しかしくりぬき舟は，もともと1本の木をくりぬいて作る以上，その大きさには制約がある。大量の物資の輸送を必要としていたニジェール川中流域で好んでもちいられたのは，板を紐でしばって作ったしばり舟であった。

## 2)　しばり舟の製法

ニジェール川の中流域でもちいられていたしばり舟には，2つの種類がある。鉄をまったくもちいず，全ての板を紐で縫いあわせたタイプのしばり舟と (図19)，板を鉄のかすがいでとめて作った前後2つの部分を，紐でしばって作るタイプのものである

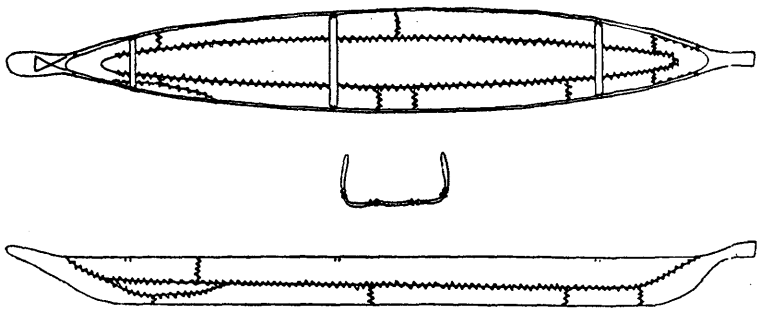


図19　ガオ型のしばり舟 [PITOT et DAGET　1948: pl. II]

28) FERNANDES のほかにも，16，17世紀の多くのヨーロッパ人交易者が大型のくりぬき舟について書いている。PACHECO PEREIRA がナイジェリア東南部で見たのは一度に80人を運べるくりぬき舟であったし [PACHECO PEREIRA　1956 (1506–08): 147]，ガンビア川で GOMES が見たのは38人ずつの戦士ののった2隻の戦闘用のくりぬき舟であった [GOMES　1959 (15c末): 46]。さらに現在のガーナの地でオランダ人 DE MAREES の見た舟は，帆をかけて外洋を自由に航行することのできる10メートル以上の長さの大型のくりぬき舟であった [DE MAREES　1987 (1602): 118]。ヨーロッパ人の手でこれまでに報告されたくりぬき舟のうちもっとも大きなものは，ニジェール川河口で観察された長さ24メートルのもので，100人以上の人間を運ぶことができたとされている [SMITH　1970: 518]。一方ニジェール川中流域では，大木が少ないところから，くりぬき舟を2つつなげたものやしばり舟が好んで用いられていた。19世紀にセグーの地を支配したフランスの MAGE は，長さ10メートルのくりぬき舟を縦に2つ結んだ大きな舟を見ているし [MAGE　1980 (1868): 80]，おなじく19世紀のルネ・カイエののったしばり舟は長さが30メートルもある巨大なものであった [CAILLIÉ　1980 (1828): 171]。また20世紀の初めにジェンネの植民地執政官であったモンテイユは，ガオ帝国の時代にもちいられていたとされる伝説的なしばり舟について書いているが，それは1度に6000本の塩の板（約180トン）を運ぶことのできる巨大な舟であった [MONTEIL　1971 (1932): 247]。

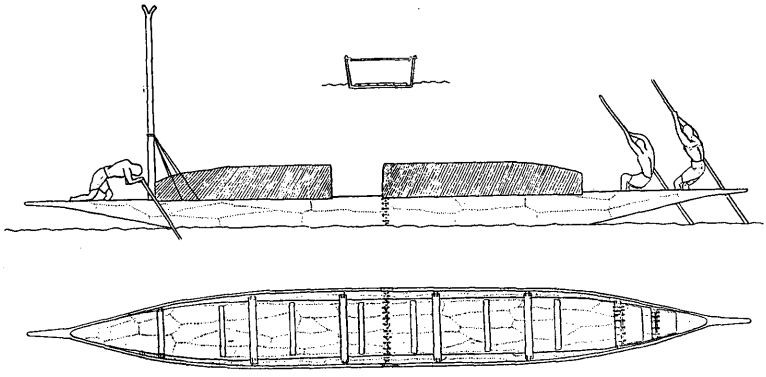


**図20** ジェンネ型の舟
かすがいで止めて作った前後2つの部分を紐でしばりあげたもの
[PITOT ET DAGET 1948: pl. II]

(図20)。この地方の舟についてほとんど唯一の研究をあらわしたピトとダジェは，前者をガオ型，後者をジェンネ型と呼んで区別している [PITOT et DAGET 1948: 19–23]。後者のタイプの舟は，ジェンネ付近のボゾが発明したものといわれ [MONTEIL 1971 (1932): 246]，内陸三角洲で見られる舟は今ではすべてがこのタイプになっている。もう1つのガオ型のしばり舟は，デボ湖より下流では今でも存在することはするが，その数はわずかでしかない。それゆえ以下にジェンネ型のしばり舟の製法について見ていくことにしたい。

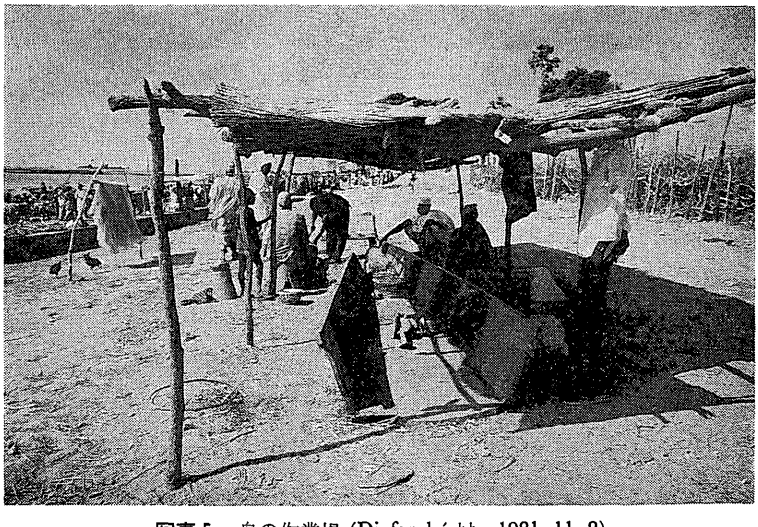


**写真5**　舟の作業場 (Diafarabé 村　1981. 11 .8)

**表3**　しばり舟の幅と長さ，積載量

| 幅 | 長さ | 積載量 | 費用 |
|---|---|---|---|
| 2 足 | 23×2 足 | t | 千 CFA |
| 2.5 | 30×2 | 0.8 | 125 |
| 3 | 35×2 | 2 | 150 |
| 3.5 | 40×2 | 3 | 175 |
| 4 | 50×2 | 4,8 | 250 |
| 5 | 60×2 | 10 | 350 |
| 6 | 68×2 | 20 | 550 |
| 7 | 80×2 | 34 | 1,000 |
| 8 | 87×2 | 45 | 1,250 |
| 9 | 92×2 | 80 | 2,000 |
| 10 | 100×2 | | 3,500 |
| 11 | 105×2 | | 5,000 |
| 12 | 110×2 | 120 | 8,000 |

(1985年 Nouh 村での調査)

ニジェール川沿いの漁民の村を訪れると，たいてい川辺りによしず掛けの小屋が立てられてあり，中で舟を作っているのを見ることができる。かれらの中には舟大工と称することのできる専業的な技術者もいれば，ふだんは漁をして，漁のないときだけ舟を作る者もいる。舟の材料となるような大きな板はこの地方にはあまり存在しないので，南のコード・ディボワールから運ばれてくるものが用いられている。板の手配は一般に舟大工の仕事であるが，なかには依頼者自身が板をもちこんで，請負で舟が作られることもある。

注文が入ると，地面の上に直接設計図が描かれ，その上に板が並べられていく。舟の形や大きさには村ごとの傾向があり，長さと幅の割合は村ごとに定められている。この地方には長さをはかる計測器が存在しないので，英語のフィートと同じように長さはすべて足の裏で計られ，1足分を基礎として，2足分，3足分と数えてられいく。内陸三角洲の造船の中心地の1つであるヌー村の場合，最小の舟は幅2足分，長さ22-23足分と定められており，これを前後に2つつなげたものが全体の大きさである。舟は幅で2足半，3足と大きくなっていき，最大で幅12足，長さ80足，高さ8足の舟になる。この大きさは船底のそれであるため，舟の甲板の部分の大きさはこれより2割程度大きくなる。1足を30センチメートルとして計算した場合，この地方最大の舟で，甲板の部分の長さ60メートル，幅4.5メートル，高さ2.5メートルという大きなものになるわけである（表3）。

板が十分集まったことが確認されれば，いよいよ製作が開始される。2つの部分の

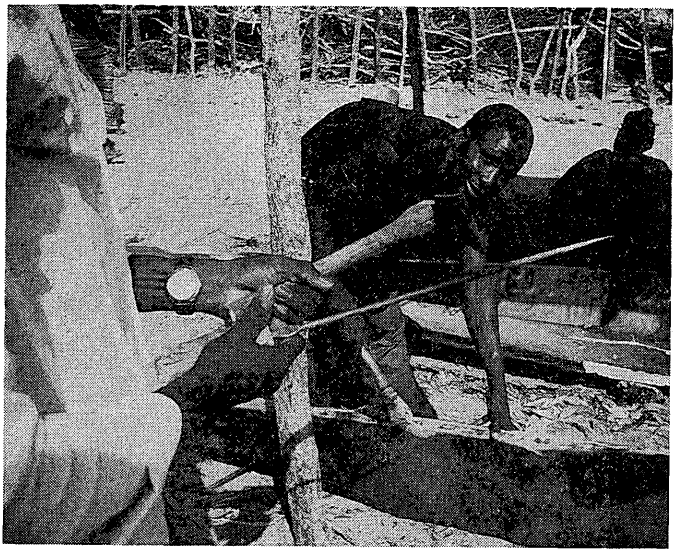


**写真 6**　舟を作るための道具手斧と錐 (Diafarabé 村　1981. 11. 8)

うちまず最初に前半分が作られるが，それは舟のうち前の部分がもっとも重要であり，またそれを作るのが難しいので，それから作られるのである。舳先用に木をくり抜いたものに底板をはりあわせ，ついで側板がはられていく。これにもちいられる道具は手斧ときりだけである。モプチやヌーといった造船の中心地では，近年になって鋸ももちいられるようになってきたが，それ以外の村ではむしろ例外的である。2枚の板はできるだけ接合面が大きくなるように斜めに削られ，物差しも鋸ももちいずに真っ直ぐに削っていく技術はまったく見事である。

2枚の板がきっちり嚙みあっていることが確かめられれば，つぎはかすがいでとめ合わされる。作業所の近くに火をおこしてきりを真っ赤に熱し，嚙み合わせた2枚の板にこれを押しあてて穴をあける。ついで板と板のあいだに，水が入らないようにカリテの油にバオバブの粉末をまぜた詰め物を厚くぬって，内側からかすがいを通してこれをしっかり固定するのである。

こうした作業をくりかえして前後同型のものが2つできあがると，いよいよ両者が結びあわされる。このためにもちいられる縄は，現地で栽培されるダー (*Hibiscus cannabinus*) の繊維から作ったものである。2つの部分の接合面から 10 cm ほどの所にきりをもちいて一列に穴があけられると，両者が擦れあわないように間に詰め物をして縄で結びあわされる。それがおわると，舟の全面にカリテの油に炭の粉を溶いたものを塗って板の腐敗を防止する。そして最後に，舟の舳先の部分にさまざまな模様

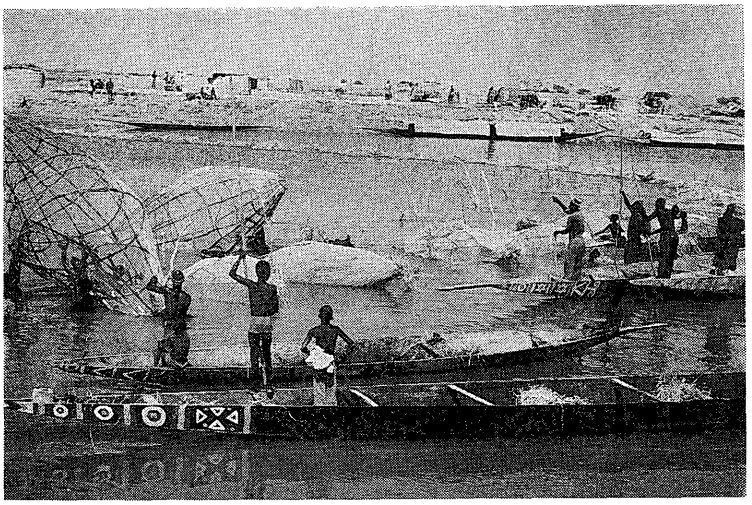


**写真7**　舟の舳先に描かれた模様。大型の筌をもちいたジェネ漁 (Mudu 村　1986. 11. 15)

が描かれて完成となるのである。

舟を作るのはこの地方の先住民族であるボゾの仕事である。この地方には，専業的な漁撈民としてかれらのほかに，かつてのバンバラ王国の漁業と水上運搬の「カースト民」であったソモノが存在するが，舟を作ることができるのはボゾだけである [Paques　1954: 96; Jeay　1980: 18]。そうした規定に，この地方の水域の真の所有者とみなされている「水の精霊」にたいする信仰が作用していることは間違いない[29]。また舟の舳先に模様を描くのも舟大工の仕事であるが，その意味は今日に伝えられていない。しかし植民地時代の研究を見ると，その意味内容について世界の創造や「水の精霊」との結びつきが指摘されており [Griaule et Dieterlen　1949: 211–212]，日本における「舟魂さま」の信仰のようなものがかつては存在していたのかもしれない。

### 3)　しばり舟の起源

こうした種類の舟はいつ頃，どのようにして作りはじめられたのであろうか。鉄のかすがいをもちいた舟についていえば，19世紀前半以前にさかのぼらないことは確実である。というのも，1833年にジェンネからトンブクツーまで舟旅をしたカイエは，ニジェール川に浮かぶいくそうものしばり舟を見ており，そのなかのものは長さ30メ

29) ボゾの「水の精霊」については [竹沢　1988: 874 sq.] を見よ。

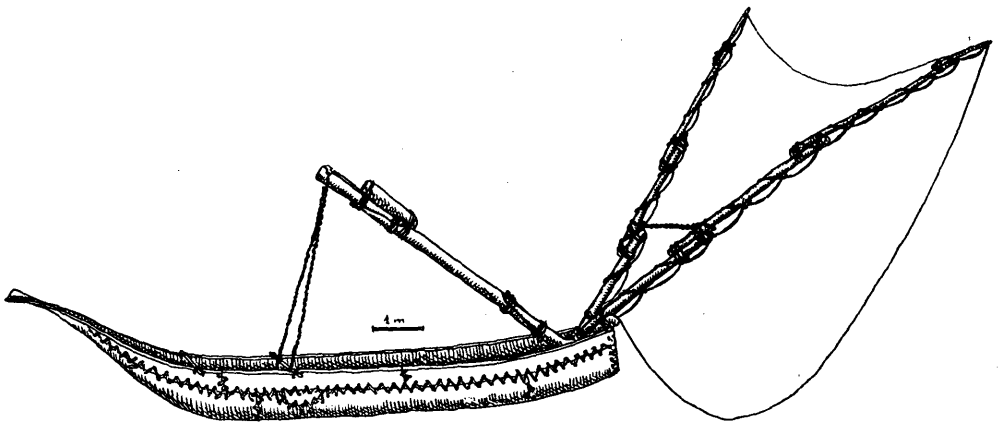



図21　Kotokoのしばり舟（チャド共和国）[BLACHE ET MITON　1963: 78]

ートルにおよぶ大きなものであったが，「(この地方の)人びとは，舟を作るのに鉄をもちいる習慣がない」とはっきり書いているからである [CAILLIÉ　1979 (1828): 171]。

一方，鉄をまったくもちいず，すべてを縄でしばったいわゆるガオ型の舟の方はどうであろうか。このタイプの舟が報告されているのは，西アフリカではこのニジェール川中流域のほかに，先に見たセネガル川流域，そしてチャド湖南部の，かつてコトコ王国の栄えたチャリ川流域である [BLACHE et MITON　1962: 59, 78] (図21)。これらの土地はいずれもサハラ砂漠に接する箇所であり，西アフリカのうちでももっとも強く北アフリカ文化の影響を受けた土地である。そうであれば，鉄をもちいないで板を縄でしばって舟を作るという技術は，北アフリカからイスラム勢力の手をへて西アフリカに導入されたのであろうか。

性急な結論をくだす前に，立ち止まって考えることが必要である。このタイプの舟を必要とする条件は何であろうか。そこには2つの条件があると思われる。1つは，大型のくりぬき舟を作るのに必要な大木が存在しないことであり，もう1つは，にもかかわらず政治・経済的な理由により大型の舟にたいする需要があることである。

西アフリカのうちでも巨木の茂る森林地帯にはこのタイプの舟は存在せず，くりぬき舟が主流を占めていた。そのなかには，すでに見たように100人あまりの人間を一度に運べるものもあったし，それでもなお小さく感じられたときには，セグーの舟のように2つのくりぬき舟を縦に長くつなげて使うこともできた。これにたいし，サハラ砂漠に接するニジェール川中流域やチャド湖付近では木が不足しており，大型の舟を作ることはきわめて困難だったのである。

しかしその一方で，これらの地域は北の砂漠と南のサバンナの接する地点にあたり，

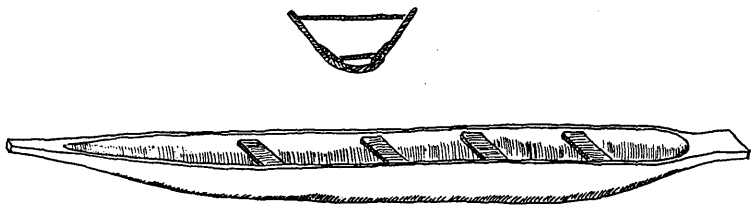


図22　チャド湖南部でハウサの用いる準構造船 [BLACHE et MITON　1963: 120]

両者のあいだの交易を軸として，古くから強大な国家や，トンブクトゥに代表される大都市が成立していた。なかでもこれらの都市は砂漠かそれに近い土地に成立していたため，穀物をはじめとする大量の生活物質を他の土地から運んでくる必要があった。砂漠の中にあるトンブクトゥの繁栄が，南のジェンネを中心にした内陸三角洲という穀倉地帯に支えられていたように [TARIKH EL-FETTACH　22–25]，セネガル川流域にきずかれた16世紀以降のワアロ王国も舟で大規模に塩や穀物の取りひきをおこなっており [BARRY　1985 (1972): 60, 103]，「農業の困難であった」チャド湖畔に栄えたボルノ王国もそうだったのである [URVOY　1949: 45][30]。

ここで興味深い事実は，チャド湖およびその南部の地域で，パピルス舟からくりぬき舟，くりぬき舟の両側に側板をはった準構造舟（図22），そして全体を綱でしばったしばり舟（図21）までがそろって見られることである [BLACHE et MITON　1963: 59, 115, 120]。一方ニジェール川流域では，これほど徹底した発展のあとを見ることはできないが，くりぬき舟，くりぬき舟を2つつなげたもの，そしてしばり舟という発展を推測することは可能である。これらの事実は，北アフリカの影響なしで，西アフリカで独自にしばり舟が開発されたことの可能性を十分に示しているといえよう。

### 4）歴史のなかのしばり舟

西アフリカの歴史のなかでしばり舟がもっとも重要な役割をになったのは，ニジェール川中流域をおいてない。その舟は，ジェンネという後背地にささえられた砂漠の交易都市トンブクトゥの繁栄を保障していたし，また軍隊の移動や通信の迅速を可能にすることで，マリやガオ等の大帝国の政治支配を容易にしたのであった。

大帝国の時代のトンブクツーの繁栄については，さまざまな記録が証言している。

30）チャド湖付近の交易にしばり舟が用いられていたかどうかについては，記録を入手していない。ただ，チャド湖付近に10世紀から覇権をひろげたボルノ-カネム帝国において，塩とチャド湖でとれる干し魚の交易はたいそう盛んであったこと，そしてチャド湖付近では耕作がほとんど不可能であったため，食糧はより南部の地からはこばれていたことは明記されている [URVOY　1949: 34]。しばり舟がこれらの物資の輸送にもちいられていた可能性は，十分にあったのである。

「(1591年の) モロッコ軍の遠征の前夜，トンブクトゥはその美と栄光の頂点にたっしていた。宗教はこの地に花開き，預言者の伝統は，宗教的な領域であれ世俗的な領域であれ，あらゆるものに生命を与えていた。それは驚くべきことである。なぜならこの2つの領域は，定義からいっても重なることはないからである」 [TARIKH EL-FETTACH: 312]。

この表現は誇張ではなかった。トンブクトゥの町には，それぞれ50から100人の徒弟をかかえた機織り師の作業場が26あったし [*ibid.*: 315]，コーランの読み書きを数える学校も150を数えていた [*ibid.*: 315]。この町を訪れる外国人交易者は，「フェスやモロッコからだけでなく，カイロからもたくさん来ていた」し [LANGE et BERTHOUD 1972: 327–329]，かれらの運んでくる商品，とくに布や絹，貝，銀にたいする需要は多くあり [*ibid.*: 329]，「ヨーロッパの布も多数売られ」ていた [LÉON L'AFRICAIN 1956: 467]。そのおかげで，「この町の外国人商人はとても豊かだった」のである [*ibid.*: 467]。

こうしたトンブクツーの繁栄を支えていたのは，後背地としてのジェンネおよびニジェール川内陸三角洲の存在であった。というのも，16世紀にトンブクツーを訪れたレオ・アフリカヌスが言明しているように，「トンブクツーには穀物や家畜はじつにたくさんあるが……その周りには1つの畑も果樹園も見あたらない」[LÉON L'AFRICAIN 1956: 468–469] からである。そこでこの町を維持するためには，その住人の生活に必要な生活物資を他からはこんでくる必要があった。それに用いられたのが，レオ・アフリカヌスはじめ多くの外国人旅行者も書いているように，ニジェール川の多くの舟だったのである[31] [LEON L'AFRICAIN 1956: 465; DE LA RONCIÈRE 1925: 155; FERNANDES 1938: 85]。

ジェンネとトンブクトゥの関係について，トンブクトゥで書かれた歴史書のつぎの一節ほど適確に表現したものはないであろう。

> 「ジェンネはイスラム世界のなかでもっとも大きな市場の1つである。そこでは，テガザの塩山からきた商人と，ビトゥの鉱山から金を運んできた商人とが顔を合わせる。この2つの素晴らしい鉱山は世界に類を見ないものである。ここで商売をする人間は大きな利益を得ることができるが，その儲けの大きさといったら神様だけが御存じだろう。トンブクトゥの町

31) これらの記録は曖昧さをふくんでおり，当時もちいられていたのがくりぬき舟であったのか，それともしばり舟であったのか，明確にすることは困難である。ただ，ジェノヴァの商人MALFANTEは船 (barchas) と書いており [DE LA RONCIÈRE 1925: 155]，トンブクツーで作られた歴史書も，くりぬき舟と運搬用の大型船とを区別して書いている [TARIKH EL-FETTACH: 270]。ここから，この時代にすでにしばり舟が存在していたと考えることは十分可能であると思われる。

に，東からも西からも，北からも南からも，あらゆる方向からキャラバンがやってくるのは，神に祝福されたこのジェンネの町のおかげなのである」[TARIKH ES-SOUDAN: 22–23]。

このようにニジェール川の舟は生活物資の輸送に大きな役割をはたしていたが，それだけでなく，政治的および軍事的な支配の確立のためにも大きく貢献していた。とくにガオ帝国の時代に，各地にあった王の領地から税をはこぶのはこの舟であり，ガオの港には常時運搬用の大型舟400隻と王直属の舟1000隻，そのほかに漁や交易用の舟が700隻あったといわれている [TARIKH EL-FETTACH: 270]。しかもそのうちのあるものは，500キロメートル離れたジェンネとトンブクツーのあいだを4日で結ぶなど，緊急の連絡用にも用いられていたのである [TARIKH ES-SOUDAN: 392–393]。

これらの舟は，どうじに軍事的目的にももちいられていた。ガオ帝国の「奴隷部族」の1つであったゼンジは，戦時には王の軍隊と兵糧をはこぶ義務をおっていたし [TARIKH EL-FETTACH: 110]，かれらをひきいる船隊の長は，王直属の将軍の1人に数えられていた [*ibid.*: 89, 209]。また，ガオの王が砂漠の中にあるワラタの町を攻撃するのに，400キロメートル離れたニジェール川から運河をひこうとしたというエピソードが示すように [*ibid.*: 114–115]，ガオ帝国の重要な戦争はすべてニジェール川沿いでおこなわれており，その領地もニジェール川にそって広がっていた [TYMOWSKI 1967: 85]。

このようにしてニジェール川の舟（おそらくしばり舟）は，中世の西アフリカにおいてもっとも繁栄と集権化を実現したガオ帝国の，政治と経済を支える重要な柱の1つになっていたのである。

### 5）イスラムの影響

わたしたちが見てきたように，西アフリカのしばり舟が，古くから存在していたくりぬき舟から準構造船をへて発達してきたものであるとすれば，イスラムの直接的影響を考える必要はない。しかししばり舟を必要とした論理の成立——大木の少ない地方に，大量の物資の輸送を必要とする政治・経済的体制が確立したこと——においては，イスラムの影響は決定的であった。というのも，これまでに報告されたしばり舟の存在は，ニジェール川中流域やセネガル川流域，チャド湖湖畔にかぎられているが，それらはいずれも北アフリカとの交易で栄えた土地であり，それを基礎に都市や大帝国の成立を見たのであった。そしてイスラムは，これらの都市や大帝国の建設に決定的な役割をはたしていたからである。

## 結　　論

わたしたちはこの研究を2つの観点からおこなってきた。西アフリカの物質文化にたいするイスラムの影響と，歴史資料としての物質文化の可能性である。したがって結論も，この2つの観点から論じていくことにしたい。

まずイスラムの影響について。わたしたちがここで取りあげた4つの項目――稲その他の栽培作物，コーラナッツ，綿と毛の布，しばり舟――のうち，布を織る技術をのぞいては，イスラムのはたした役割はむしろ二次的なものにすぎなかった。イスラムは直接それらの技術をもたらしたわけではなく，すでに西アフリカに存在していたそれらの技術や事項の，伝達と拡散の役割に終始したように思われるのである。

そうしたことは，おそらく西アフリカの物質文化が，栽培作物についてもその他の技術についても，イスラムの浸透以前にすでにかなりの成熟をもって成立していたためである。その結果，イスラムが10世紀以降にこの地に伝えられたとき，それは技術革新の大きな要素となることはできず，むしろすでにあった技術の発展と拡散のための一種の触媒として作用するにとどまったのである。(ただ足踏み式織機とその素材としての綿花や羊毛については，その導入がイスラムの影響の開始と前後しているのは事実である。現時点ではイスラム以前であるとも，以後であるとも確証することはできないのである)。

しかし他方で，西アフリカの文化受容の否定的側面もまた認識すべきであろう。つまり，当時もっとも先進的であったイスラムの物質文化を部分的にしか受容しなかったということであり，そして16世紀のトンブクトゥやガオ帝国に花開いた西アフリカ文化の精髄が，その後ほとんど発展らしい発展を見なかったということである。ここでわたしたちが取りあげたいくつかの物質文化と，それをふくめた社会的・経済的な諸制度は，15-16世紀のニジェール川中流域にすべて出そろったのち，19世紀の一連のジハード国家の成立まで長い停滞の時期を経験したようである。もちろんそこには，サバンナから森林地帯に向かう拡大の流れは存在していた。しかしそれは量的な拡大であって，質的な発展であったとは思われないのである。

そうしたことには，モロッコ軍によるガオ帝国の壊滅と，サハラの乾燥化にともなうサハラ遊牧民の南下，そしてヨーロッパ勢力の奴隷貿易がもたらした人口停滞等の外的要因が作用していたことは疑いない。しかしそれだけでなく，西アフリカの諸社会の側にも順調な発展を阻害した（あるいは発展を必要としなかった）諸要因はおそらく存在していたのである。わたしたちはそれを見きわめることによって，社会的お

**表4**　西アフリカの諸社会の，稲，ワタ，コーラナッツの名称の比較

| | Wolof | Jola | Furbe | Bambara | Sonrai | Mossi | Ashanti | Hausa | Yoruba |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| rice (0 c?) | malo | emano | malo | malo | moo | malo | muu | sinkafa moo | sinekafa |
| coton (8 c?) | wutèn | buhul | hotollo kotollal | kòori | haabu | lamdo | asáwá | awudga kuda | éfewú owu |
| kola (11 c?) | guro | guru | goro woro | goro woro | goro | gure | bese | goro | o-bi |

稲については [PORTÈRES 1959: 189-233]，コーラナッツについては [LOVEJOY 1980: 97-134]，綿については [RAMBAUD 1903: 65; WINTZ 1909: 27; LABOURET 1955: 82; BAILLEUL 1981: 114; HACQUARD & DUPUIS 1897: 217; ALEXANDRE 1955: 260; BASIL MISSIONARY SOCIETY 1973 (1909): 47; CHURCH MISSIONARY SOCIETY 1972 (1950): 43]

よび経済的な発展と「停滞」の諸条件についてより深い理解を得ることができるようになるであろう。

もう一つ，歴史資料としての物質文化の可能性について。わたしたちがここで取りあげた4つの項目のうち，しばり舟をのぞく3つについては，その名称の分布をある程度明確にたどることができる(表4)。この表と図5，図10にもとづいて，それぞれの社会における名称を比較してみると，これらの項目が拡散していった時代と状況について概観を得ることができると思われる。

わたしたちは先に，グラベリマ稲の栽培化の時期を紀元前後，繊維をとるためのワタと足踏み式織機の導入を8世紀前後，そしてサバンナ地帯におけるコーラナッツの商品化の時期を11世紀から14世紀のあいだにおいた。この推定年代とこれらの項目の名称の分布とを比較してみると，興味深いのは，たとえば歴史的に稲作が大きなウエイトを占めたことが明らかであるソンライ社会へのその導入が，比較的のちの時代に属すると思われることである。ソンライの伝承によれば，その先祖は東の土地からきたとされており，そのことはナイロート系に属するかれらの言語によって証明されている。おそらくかれらはそれまで稲作を知っていなかったが，ニジェール川流域にたっするとどうじに先進のマンデからこれを受けとって，その栽培に熱心になるとともに民族的発展の契機としたのであろう。そしてそれが，のちに西アフリカの歴史上もっとも広大な地域を支配し，もっとも集権的な政治制度を実現したガオ帝国の成立のための布石となったのである。

またこの表からうかがえるのは，西アフリカの歴史においてマンデ系社会のはたした役割の大きさである。それは，それまでのアフリカの農業水準をおそらくこえていた稲作の技術を他に伝えただけでなく，すぐれた交易品としてのコーラナッツの商品化をはたし，そしてイスラムの要請をみたす機織り技術の拡散など，さまざまな点に

おいて西アフリカの諸社会の歴史的成熟のための重大な要因となった。その意味で，マンデ系社会を看過しては西アフリカの歴史を考えることはできないといっても過言ではないだろう。

ただここでは深く考察することができなかったが，稲とコーラナッツの名称がかくも広範囲に共通しているのにくらべると，ワタの名称に際だった差異が存在することは1つの謎として残る。しかもその名称は，古くから食用に用いられていたと思われる熱帯雨林地帯だけでなく，イスラム世界の強い影響があったであろうサバンナ地帯でも大きくことなっている。あるいはこのことは，繊維に用いられるワタがイスラム世界を経由してはじめて伝えられたというより，むしろ西アフリカでかなり古い時期から，食用および布以外の繊維として活用されていたことを示す資料であるのかもしれない。この点については今後さらに広範囲な研究をおこなうことにしたい。

わたしたちがここで取りあげた物質文化の項目は4つだけであり，そこからこれ以上まとまった結論を引き出すことは困難である。ただ，今後取りあげる項目の数をふやしていくことによって，西アフリカの歴史についてのより深い理解を得ることは可能になるであろう。そしてそれをおこなうことによって，はじめて歴史資料としての物質文化の有効性についても正確な判断が下せるようになるであろう。今後の課題としたい。

またここではとりあげなかったが，西アフリカの歴史を考えるうえで不可欠の物質文化がいくつかある。たとえば，農業技術や武器として決定的な役割をはたした鉄その他の金属加工の問題，西アフリカの広い地域で古くから貨幣としてもちいられていたタカラガイ，そして西アフリカの繁栄をもたらした金の問題等である。とくにこの最後の点は，たんに西アフリカの経済的発展だけでなく，ヨーロッパ世界が中世から近世に移行するうえで決定的な役割を果たしたことがマルク・ブロックやブローデルらの古典的研究いらい明らかにされており，世界史像の再考につながる重要な問題を提起するものである。稿をあらためて論じることにしたい。

さらにここでとりあげた物質文化に密接に結びつく事項として，これらの技術を担った（担わされた）社会集団としてのいわゆるカースト制や奴隷制の問題がある。これらの問題についても，機会をあらためて考える予定である。

# 文　　献


ALEXANDRE, R. P.

1953 *La Langne mõré.* Mémoires d' I.F.A.N., no. 34.

AMSELLE, Jean-Loup

1977 *Les Négociants de la savanne.* Ed. Anthropos.

BAILLEUL, Charles

1981 *Petit Dictionnaire, Bambara-Français, Français-Bambara.* Avebury Publishing.

BARRY, Boubacar

1972 *Le Royaume du Waalo.* Maspero.

BARTH, Heinrich

1965 (1865) *Travels and Discoveries in North and Central Africa.* 3 vol., Centenary Edition, Frank Cass.

BASIL MISSIONARY SOCIETY

1973 (1909) *A Dictionary English-Tshi (Ashanti).* Afro-Press.

BEDAUX, R. M. A. & Rita BOLLAND

1980 Tellem, reconnaissance archéologique d'une culture de l'Ouest africain au Moyen-Age. *J.S.A.* 50(1): 9–23.

BINGER, Le Capitaine

1980 (1892) *Du Niger au golfe de Guinée.* Société des Africanistes.

BLACHE, J. et F. MITON

1963 *Première contribution à la connaissance de la pêche dans le bassin hydrographique Logone-Chari-lac Tchad.* O.R.S.T.O.M.

BOSER-SARIVAXÉVANIS, Renée

1972 *Les Tissus de l'Afrique occidentale.* Pharos-Verlag Hansrudolf Schwabe AG.

1977 Recherche sur l'histoire des textiles traditionnels tissés et teints de l'Afrique occidentale. *Verhandlungen der Naturforschenden Gessellschaft in Basel* 86(1/2): 301–341.

BOVILL, E. W.

1978 (1958) *The Golden Trade of the Moors.* Oxford U.P.

CAILLIÉ, Rene

1979 (1828) *Voyage à Tombouctou.* Maspero.

CALVOCORESSI, D. & Nicholas DAVID

1979 A New Survey of Radiocarbon and Thermoluminescence Dates for West Africa. *J.A.H.* 20(1): 1–29.

CHANG, T. T.

1976 Rice, *Oryza sativa* and *Oryza glaberrima.* In N. W. Simmonds (ed.), *Evolution of Crop Plants,* Longman, pp. 98–104.

CHEVALIER, A.

1932 Nouvelle contribution à l'étude systématique des Oryza. *R.B.A.A.T.*: 1014–1032.

1937 Sur les riz africains du groupe *Oryza glaberrima.* *R.B.A.A.T.*: 413–418.

1938 Le Sahara, centre d'origine de plantes cultivées. *Société de Biogéographie,* mémoire n.6: 307–322.

CHURCH MISSIONARY SOCIETY

1972 (1950) *A Yoruba-English Dictionary.* Oxford U.P.

CISSOKO, S. M.

1975 *Tombouctou et l'empire songhay.* Les Nouvelles Editions Africaines.

CLARK, J. D.

1970 *The Prehistory of Africa.* Thames and Hudson.

COCKBURN, A. R. *et al.*
1975 Autopsy of an Egyptian Mummy. *Science* 187: 1155–1160.

COHEN, Abner
1966 Politics of the Kola Trade. *Africa* 36(1): 18–36.
1971 Cultural Strategies in the Organization of Trading Diasporas. In C. Meillassoux (ed.), *The Development of Indigenous Trade and Markets in West Africa*, Oxford U.P., pp. 266–281.

CUOQ, Joseph M.
1975 *Recueil des sources arabes concernant l'Afrique occidentale du VIIe au XVIe siècle.* Editions du C.N.R.S.

COQUERY-VIDROVITCH, Catherine
1969 Recherche sur un mode de production africain. *La Pensée* 144: 61–78.

CURASSON, G.
1932 *Le Mouton au Soudan français.* L'Union ovine coloniale.

CURTIN, Philip D.
1971 Pre-colonial Trading Networks and Traders : the Diakranke. In C. Meillassoux (ed), *The Development of Indigenous Trade and Markets in West Africa*, Oxtord U.P., pp. 228–239.
1975 *Economic Change in Precolonial Africa.* Univ. of Wisconsin Press.

DE LA RONCIÈRE, Ch.
1925–27 *La Découverte de l'Afrique au Moyen Age.* La Société de Géographie d'Egypte, 3 vols.

DE MAREES, Pieter
1987 (1602) *Description and Historical Account of the Gold Kingdom of Guinea.* A. van Dantzig and Adam Jones, trans., Oxford U.P.

DEVISSE, Jean
1972 Route de commerce et échanges en Afrique Occidentale en relation avec la Méditerranée. *Revue d'Histoire économique et sociale* : 42–73, 357–397.

DIETERLEN, Germaine
1950 *Essai sur la religion Bambara.* P.U.F.
1955 Mythe et organisation sociale au Soudan français. *J.S.A.* 25: 39–76.

DOGGETT, H.
1976 Sorghum: *Sorghum bicolor.* In N. W. Simmonds (ed), *Evolution of Crop Plants*, Longman, pp. 112–117.

DOUTRESSOULLE, G.
1947 *L'Elevage en Afrique Occidentale Française.* Larose.

DRESCH, J.
1949 La riziculture en Afrique occidentale. *Annales de Géographie* 312: 295–312.

ENDREI, Walter
1968 *L'Evolution des techniques du filage et du tissage.* Mouton.

エヴァンズ＝プリチャード
1978 (1940) 『ヌアー族』向井元子訳　岩沢書店。

FERNANDES, Valentim
1938 (1506–07) *Description de la Côte d'Afrique de Ceuta au Sénégal.* P. de Cenival et Th. Monod, trans., Larose.
1951 (1506–1510) *Description de la Côte occidentale d'Afrique (du Sénégal au Cap de Monte, Archipels).* Th. Monod *et al.*, trans., Centro de Estudos da Guine Portuguesa, n. 11.

FRANÇOIS, M. G.
1918 *Les Productions de l'Afrique Occidentale Française.* Ministère des Colonies, Office colonial.

GALLAIS, Jean
1967 *Le Delta intérieur du Niger.* Mémoires de l'IFAN, n. 78.
GOMES, Diogo
1959 *De La Première découverte de la Guinée.* Th. Monod *et al.*, trans., Centro de Estudos da Guine Portuguesa, n. 21.
GOODY, J. and T. H. MUSTAPHA
1967 The Caravan Trade from Kano to Salaga. *Journal of the Historical Society of Nigeria* 3(4): 611–616.
GRIAULE, M. et G. DIETERLEN
1949 L'agriculture rituelle des Bozo. *J.S.A.* 19(1): 209–222.
1965 *Le Renard pâle.* Institut d'Ethnologie.
グリオール，マルセル
1981 (1948) 『水の神』坂井信三・竹沢尚一郎訳　せりか書房。
HACQUARD & Dupuis
1897 *Manuel de la langue soñgay.* Maisonneuve.
HARLAN, Jack R.
1971 Agricultural Origins: Centers and Noncenters. *Science* 174: 468–474.
1982 The Origins of Indigenous African Agriculture. *The Cambridge History of Africa,* Vol. 1, Cambridge U.P., pp. 624–657.
HARLAN, J. R. and Ann STEMLER
1976 The Race of Sorghum in Africa. In J. R. Harlaan, *et al.* (eds.), *Origins of African Plant Domestication,* Mouton, pp. 465–478.
HENRY, Yves
1908 Elevage du mouton à laine en Afrique Occidentale. *L'Agriculture pratique des pays chauds* 8(2): 182–192.
HEUZY, J.-A.
1941 Note sur le tissage au Soudan. *Bulletin de l'I.F.A.N.* 3: 145–150.
HOLAS, B.
1957 *Les Sénoufo(y compris les Minianka).* P.U.F.
HOPKINS, A. G.
1973 *An Economic History of West Africa.* Longman.
IZARD, Michel
1971 Les Yarse et le commerce dans le Yatênga pré-colonial. In C. Meillasoux (ed.), *The Development of Indigenous Trade and Markets in West Africa,* Oxford U.P., pp. 214–227.
JEAY, Anne-Marie
1980 Les Somono du moyen Niger. *Etudes maliennes* 1980(2): 7–27 bis.
JOBSON, Richard
1904 (1623) *The Golden Trade or a Discovery of the River Gambra.* E. E. Speight & R. H. Walpole.
JOHNSON, Marion
1976 The Economic Foundations of an Islamic Theocracy: The Case of Masina. *J.A.H.,* 17(4): 481–495.
川田順造
1976 『無文字社会の歴史』岩波書店。
1981 『サバンナの手帖』新潮社。
KAWADA, Junzo
1988 La Boucle du Niger du point de vue de la culture matérielle. *Boucle du Nger, approches multidisciplinaires,* Institut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique, pp. 11–82.
川田順造編
1987 『民族の世界史12，黒人アフリカの歴史』山川出版社。

LABOURET, H.
1955 *La Langue des peuls ou foulbé.* Memoires d' I.F.A.N.,
LAMB, Venise
1975 *West African Weaving.* Duckworth.
LANGE, Dierk et Silvio BERTHOUD
1972 L'intérieur de l'Afrique occidentale d'après Giovanni Lorenzo Anania (XVIe siècle). *Cahiers d'histoire mondiale* 14(2): 298–351.
LAUZANNE, Le Capitaine
1920 La culture du riz dans le cercle de Gao. *B.C.E.H.S.A.O.F.* 2: 177–180.
LEON L'AFRICAIN, Jean
1956 (1526) *Description de l'Afrique.* A. Epaulard, trans., Maisonneuve.
LEVTZION, Nehemia
1968 *Muslims and Chiefs in West Africa.* Clarendon Press.
LEVTZION, N. and J. F. P. HOPKINS
1981 *Corpus of Early Arabic Sources for West African History.* Cambridge U.P.
LEWICKI, Tadeusz
1964 Traits d'histoire du commerce transsaharien. *Etnografia polaska* 8: 291–311.
LOMBARD, Maurice
1971 *L'Islam dans sa première grandeur.* Flammarion.
1978 *Les Textiles dans le monde musulman VIIe–XIIe siècle.* Mouton.
LOVEJOY, Paul E.
1971 Long-Distance Trade end Islam. *Journal of the Historical Society of Nigeria* 5(4): 537–547.
1973 The Kambarian Beriberi: The Formation of a Specialized Groupe of Hausa Kola Traders. *J.A.H.* 14(3): 633–651.
1978 The Role of the Wangara in the Economic Transformation of the Central Sudan in the Fifteenth and Sixteenth Centuries. *J.A.H.* 19(2): 173–193.
1980 Kola in the History of West Africa. *C.E.A.* : 97–134.
MAGE, Eugène
1980 *Voyage au Soudan Occidental* (**1863–1866**). Karthala.
MAUNY, Raymond
1961 *Tableau géographique de l'Ouest africain au moyen âge.* Mémoires de l'I.F.A.N., n. 61.
MCINTOSH, R. J. and S. K. MCINTOSH
1981 The Inland Niger Delta before the Empire of Mali. *J.A.H.* 22(1): 1–22.
MONTEIL, Charles
1927 *Le Coton chez les Noirs.* Larose.
1930 *Les Empires du Mali.* Larose
1971 (1932) *Une Cité soudanaise, Djenné.* Ed. Anthropos.
MUNSON, P. J.
1976 Archaeological Data on the Origins of Cultivation in the Southern Sahara and their Implications for West Africa. In J. R. Harlan, *et al.* (eds.), *Origins of African Plant Domestication*, Mouton, pp. 187–209.
MURDOCK, George Peter
1959 *Africa: Its Peoples and Their Culture History.* McGraw-Hill.
NICOLAS, François-J.
1958 Le bouracan ou bougran, tissu soudanais du moyen âge. *L'Anthropos* 53: 265–268.
NORMAN, M. J. T. *et al.*
1984 *The Ecology of Tropical Food Crops.* Cambridge U.P.
PACHECO PEREIRA, Duatro
1956 (1506–08) *Esmeraldo de Situ Orbis.* Centro de Estudos da Guiné Portuguesa, n. 19.
PALMER, H. R.
1928 *Sudanese Memories.* 3 vol., Goverment Printer.

PAQUES, Viviana
1954 *Les Bambara.* P.U.F.
パーク，マンゴ
1978 (1907) 『ニジェール探検行』森本哲郎・広瀬裕子訳　河出書房新社。
PAULME, Denise
1957 Des riziculteurs africains: les Baga. *Les Cahiers d'Outre-Mer* 39: 257–279.
1970 (1954) *Les Gens du riz: les Kissi de Haute-Guinée.* Plon.
PELISSIER, Paul
1966 *Les Paysans du Sénégal.* Fabregne.
PERSON, Yves
1968 *Samori: Une Révolution dyula.* t.l, mémoires de l'I.F.A.N., n. 80.
PHILLIPSON, David W.
1985 *African Archaeology.* Cambridge U.P.
PICTON, John and John MACK
1979 *African Textiles.* British Museum Publications.
PIERRE, C. et C. MONTEIL
1905 *L'Elevage au Soudan.* Augustin Challamel.
PITOT, A. et J. DAGET
1948 *Les barques du moyen Niger. Documents d'ethnologie navale.* fascicule 5.
PORTÈRES, Roland
1950 Vieilles agricultures de l'Afrique intertropicale. *L'Agriculture tropicale* 5(9/10): 489–507.
1955 Taxonomie agrobotanique des riz cultivés. *J.A.T.B.A.* 5: 341–384, 541–580, 627–700.
1959 Les appellations des céréales en Afrique: les riz. *J.A.T.B.A.* 6(4/5): 189–233.
1962 Berceaux agricoles primaires sur le continent africain. *J.A.H.* 3(2): 195–210.
1976 African Cereals. In J. R. Harlan, *et al.* (eds), *Origins of African Plant Domestication,* Mouton, pp. 409–452.
PURSEGLOVE, J. W.
1976 Millets: *Eleusine coracana, Pennisetum americanum.* In N. W. Simmonds (ed.), *Evolution of Crop Plants,* Longman, pp. 91–93.
1976 The Origins and Migrations of Crops in Tropical Africa. In J. R. Harlan, *et al.* (eds.), *Origins of African Plant Domestication,* Mouton, pp. 291–309.
QUINN, Chalotte A.
1972 *Mandingo Kingdoms of the Senegambia.* Northwestern U.P.
RAMBAUD, J.-B.
1903 *La Langue wolof.* Imprimerie nationale.
RENAUD, H. P. T.
1928 La première mention de la noix de kola dans la matière médicale des Arabes. *Hespéris* 8(1): 43–57.
ROBERTS, Richard
1984 Women's Work and Women's Property. *Comparative Studies in Society and History* 26(2): 229–250.
RODNEY, Walter
1968 Jihad and Social Revolution in Futa Djalon in the Eighteenth Century. *Journal of the Historical Society of Nigeria* 4(2): 269–284.
1975 The Guinea Coast. The Cambridge History of Africa, Vol. 4, Cambridge U.P., pp. 223–324.
1980 (1970) *A History of the Upper Guinea Coast,* **1545** *to* **1800**. Monthly Review Press.
ROTH, Ling
1950 (1918) *Studies in Primitive Looms.* Bankfield Museum.

SERJEANT, R. B.
1972 *Islamic Textiles.* Librairie du Liban.
SHAW, Thustan
1976 Early Crops in Africa. In J. R. Harlan *et al.* (eds.), *Origins of African Plant Domestication,* Mouton, pp. 107–153.
SKINNER, David E.
1978 Mande Settlement and the Development of Islamic Institutions in Sierra Leone. *The International Journal of African Historical Studies* 11(1): 32–62.
SMITH, Robert
1970 The Canou in West African History. *J.A.H.* 11(4): 515–533.
竹沢尚一郎
1984 「アフリカの米」『季刊人類学』15(1): 66–118.
1987 『象徴と権力——儀礼の一般理論』勁草書房。
1988 「西アフリカのイスラム化にかんする一考察」『アフリカ研究』32: 19–43.
1988 「<水の精霊>とイスラム——ボゾ族における社会変化と宗教変化」『民族学博物館研究報告』13(4): 857–896.
TARIKH EL-FETTACH. O. Houdas et M. Delafosse, trans., Maisonneuve.
TARIKH ES-SOUDAN. O. Houdas trans., Maisonneuve.
TRICART, J.
1956 Les échanges entre la zone forestière de Côte d'Ivoire et les savanes soudaniennes. *Cahiers d'Outre-Mer* 35: 209–238.
TYMOWSKI, Michal
1967 Le Niger, voie de communication des grands Etats du Soudan occidental jusqu'à la fin du XVIe siècle. *Africana bulletin* 6: 73–95.
URVOY, Y.
1949 *Histoire de l'Empire du Bornu.* mémoires de l'I.F.A.N. n. 7.
VIGUIER, Pierre
1937 La riziculture indigène au Soudan Français, I. *Annales agricoles de l'Afrique occidentale* 1(4): 287–326.
1938 La riziculture indigene au Soudan francais, II. *Annales agricoles de l'Afrique occidentale* 2(1): 31–89.
VINCENT, Y.
1963 Pasteurs, paysans et pêcheurs du Guimballa. In *Nomades et paysans d'Afrique noire occidentale,* Faculté des Lettres et des Sciences Humaines de l'Univ. de Nancy, pp. 35–157.
VUILLET, J.
1920 L'introduction de la culture du cotonnier en Afrique Occidentale. *B.C.E.H.S.A.O.F.*: 52–59.
WATSON, Andrew M.
1983 *Agricultural Innovation in the Early Islamic World.* Cambridge U.P.
WILKS, Ivor
1982 Wangara, Akan and Portuguese in the Fifteenth and Sixteenth Centuries, I, II. *J.A.H.* 23(3): 333–349, 23(4): 463–472.
WINTZ, R. P. (ed.)
1909 *Dictionnaire Français-Dyola et Dyola-Français.* Elinkine.

abréviation

*B.C.E.H.S.A.O.F.*: *Bulletin de la Comité des Etudes Historiques et Scientifiques de l'Afrique Occidentale Française*

*C.E.A.*: *Cahiers d'études africaines*

*J·A.H.*: *The Journal of African History*

*J.A.T.B.A.*: *Journal d'Agriculture Tropicale et de Botanique Appliquée*

*J.S.A.*: *Journal de la Société des Africanistes*

*R.B.A.A.T.*: *Revue de Botanique Appliquée et d'Agriculture Tropicale*